春の野

照代が家へ歸つてからも、父母は決して親として、照代の行末を案じて、干渉がましい事は言ひませんでした。

それは前の事で懲りてゐるし、それに照代の精神生活といふものは、決して父母でも如何なる人でも支配の出來ない、偉大な神秘的な不可思議な力を持つてゐる事を知つてゐるからでした。

だから總て照代の心のまゝにして、世間の噂といふ樣な事は、氣にしない事に決めて、唯照代の心委せにさせておきました。

照代は今は全く自由を與へられた身の、伸々とした氣持で、山でも野でも里でも海岸でも、心の向く儘に歩いてゐました。

それかと言つて、唯ぼんやりとして、さすらひ廻るといふのではなく、行く日も來る日も、不思議な現象ばかりに遭遇するのでした。

或日靜かな野路を歩いてゐると、照代は二人の青年が、草原に坐つて、話してゐるのに逢ひました。

その話を聞いて見ると、同じ程の土地を持つて、同じ様にお百姓をしてゐるのに、幸次といふ青年の家は、米の收穫もずつと多いのに、清吉といふ青年の家ではどうしても收穫が少い。畑もその通り、同じ廣さといふよりも、清吉の方が幸次より少し廣い面積を持ち、しかも土地柄はよいといふのに、矢張り收穫が少いといふのです。

「私はどう考へても、合點が行かぬのだよ。田も畑も幸次さんの所より段別が多いのに、收穫といふ事になると、必ず決つて少いのだよ。一體どうしたといふのだらう。」

「さうだね。不思議だよ。全く。

種も大概相談して同じ物を蒔くし、耕作の方法も大概同じ様にしてゐるのに。」

と幸次も不思議さうに言ひました。

その時照代は後から聲をかけて、

「その事なら私が教へて上げませう。」

二人は突然に若い女の聲がしたので驚いて終ひました。

そして照代の顏を見ると、

「おゝ、貴女は八幡さんの御嬢様ではありませんか。」

二人は形を正して申しました。

「はい。それで今のお二人の話の事、教へて上げませうか。

同じだけより少し多い程度に清二さんの方は作つてゐらつしやるのに、收穫が少いといふのは、何も不思議ではありません。

今かうして話してゐらつしやるお二人は、同じ様に見えますけれど魂が違ひます。

又お父さんやお母さんの魂も違つてゐます。」

二人は不思議さうに、

「どういふ風に違つてゐませうか。」

「清二さんのお宅では、貴方もお父様も、本當にお百姓が好きではなく、遊び度い方です。お母様やお兄様も、同じ様に口ではよく精をお出しになる様に、仰有つてゐらつしやいます。又色々と秘傳や理窟は仰有いますが、種を蒔く時にも、土をよく懇ろに耕し、根本へしつかり肥料が與へてない所へ、種を蒔くのに魂が入りません。それから後で肥料を入れる時も耕す時も、土を眞から愛して懇ろに耕作をしませんから、總體的に稔りが惡いのです。

だから收穫が少いのです。

幸次さんの方は、お父さんもお母さんも、非常にお百姓が好きで、いつも骨身惜しまずお働きになります。

幸次さんもいつも農業に魂を入れてゐられますから仕事が親切です。

だから鍬を入れる時も、魂の眞底から行渡りますし、肥料もよく行渡るので、天地の神様の御聖意に叶ひますため、自然に收穫が多いのです。

これは貴方達お二人を比較したのですが、幸次さんの所でも尙一層魂を入れてお耕しになればもつと〳〵多く、吃驚する程の收穫がある様になります。

清二さんのお家でこの後も、今の様な心持で、田畑を弄んでゐると、段々土地が痩せ、作物に害蟲がついたり、日照に焦けたり、雨腐りがしたりして、まだ〳〵收穫が少くなります。

だから今の中に身を入れて、土から足を浮かせて、空を見ないで、眞心を土に打込んで、うち中の人が力を合せて、仲よく耕して御覽なさいませ。

必ず幸次さんのお宅に負けないだけの收穫があります。」

と懇ろに敎へて立ちさりました。

二人は深く感ずる所があつて、左右に別れましたが、清次はその日から、朝夕心をこめて、田畑を愛し、魂の眞底から身を入れて、耕作に從事しましたので、その秋には思ひがけぬ多く

の收穫がありました。

それから後二人の青年は、心を併せ、模範青年と一般から賞められる程、立派にその家を經營し、廳ては村の開發のためにも、手本を示して奔走しましたので、自然に村人達も各自その家々の農業に骨を折り、魂をこめて耕作する樣になつて、村の收入も多くなり、各家共に富み榮えて參りました。

ために郡内、縣内からも、視察に來る人が多くなりました。

二人の青年は人から賞められる毎に、

「これは私達の力ではなく、八幡の照代樣のお敎へのお蔭です。」

と自らを誇らず謙遜して居りました。

嵐の日

濱に要作といふ、今年二十才になる、若い漁師がありました。

家には年老いて病める母親が一人ゐましたが、要作は世にも珍らしく孝行な息子でした。

貧しい中からも、一生懸命で母に孝行を盡し、よい藥を侑め、口に合ふ物を食べさせ、夜など足腰を撫でて、病める母を慰めて居りましたので、村では、

「要作さんは、女の子でも出來ぬ程、孝行を盡す、世にも珍らしい人だ。」

と賞めぬ人はありませんでした。

母はいつも人が訪ねて來ると、

「かうして病んでゐても、要作が親切にして呉れるので、私程仕合せな者はありません。」

と喜んで話してゐました。

その孝子要作が、今朝も早く身支度して、

「お母さん、では行つて來ますが、體に氣をつけてゐて下さい。

直きに歸つて來ますから……」

母は頭を上げて、
「お前こそ氣をつけて行つて來てお呉れ。
天氣は大丈夫かえ。」
「はい、よく晴れて上天氣です。では行つて來ますよ。」
要作は元氣に出て行きました。
所がお晝頃から、海上に黑雲が出て、雨が降り、海が荒れ出したので、村の人達は驚いて、
親、夫、我が子、兄弟の安否を氣遣つて騷いでゐました。
その中段々と大方の人は、難を避けて、歸つて來ましたが、要作の舟はどうしたものか、影
も形も見えません。
みんな心配して、
「要作さんの舟がまだ歸らないよ。」
「要作さんはどうしたのだらう。」

「もう氣付いて歸れば、濱へ着く頃だがなあ。」
と口々に心配してゐました。
要作の母は、心配の余り、うちに寢てゐられないので、よぼ〳〵と杖に縋つて濱邊へ出て來
ました。
風に吹かれ雨に叩かれ乍ら、おろ〳〵して、
「うちの要作はまだ歸りませんか。
要作の舟は見えませんでせうか。」
と尋ねるのでした。
「今もその事を言つてゐるのです。要作さんの舟がまだ何處にも見えないのですよ。」
「要作に若しもの事があつたら、私はどうなるのだらう。」
母親は心配の余り狂氣の樣に、要作の名を呼び續けてゐましたが、とう〳〵泣き倒れて終ひ
ました。

雨は益々降り頻り、風はどう〳〵と、吹き暴れます。
村の人達は船をしつかり岸へ繋ぐと、各自がうちへ引上げて終ひました。
要作の母は、濱に坐つたまゝ、
「要作やい。要作やい。」
と怖ろしい音を立てゝ暴れてゐる、海に向つて叫び續けてゐました。
その時沖合から大きな傳馬船が、激浪に押揉まれ乍ら、こちらへ向つて漕ぎ寄せて參りました。
それは勿論要作の乘つた木の葉舟とは違つて、何十倍といふ大きな船でした。
軈てその船は岸に着くと、中から數人の舟子が躍り出て、勢よく船を濱へ引上げ、そのまゝ岸へ繋いで終ひました。
この舟はこの村の人の持舟ではなく、ずつと離れた島の穀物を積む傳馬船でしたが、急に起つた暴風雨のために、危險になつたので、急いでこの島へ乘りつけて、一時の難を逃れたので

した。
この出來事を村の人達も見てゐました。

老母の問え

老母はそれも氣付かず、
「要作や、要作や。」
と狂氣の樣に呼んでゐました。
不思議な事には、この大きな舟を岸に繋いだ舟子達は、暴風雨にびしよ濡れになり乍ら、水に溺れた一人の人を運び出しました。
それを見ると村人達は、
「やあ、誰か溺れ人を助けて來たぞ。」

と言ひ乍ら近付いて來ました。
村人達が見ると、それは紛れもない要作です。
「やあ、要作さんじやないか。」
「一體どこで助けて下すつたのです。」
と口々に言ふのが耳に入ると、老母はいきなり駈け寄つて縋りつき、
「要作や、要作や、お前は一體どうしたのじや。」
と泣き乍ら叫びました。
舟子達が語る所に依ると、要作は一里ばかり、沖合に、舟と共に波間に漂つてゐたが、助けやうと思つて漕ぎ寄せて行く中に、舟が覆つて、水の中へ放り出されたので、助けやうとし要作も泳ぎつかうと努力してはゐても、何しろ波が高いので思ふ様にならず、その中要作の力が盡きて、氣絶して終つた。
やつと漕ぎ寄せて、船へ上げたが、その時は早や呼吸がなかつたので仕方がなくつれて來た

との事で、要作の體はもうすつかり冷え切つて終つてゐました。
濱では早速醫師を招いて、色々手當をしましたが、醫師は殘念さうに、
「時間がたつてゐますから、もう何とも手のつけやうがありません。
誠にお氣の毒な事ですが……。」
と言ふのでした。
村人達は殘念がつて、
「先生、全く見込がありませんか。」
「駄目です。時間がたち過ぎてゐますから……。」
それを聞くと母親は、氣狂ひの樣になつて、
「先生、そんな事仰有らずに助けて下さい。
要作が死んだら、私はどうしますじや。」
と泣きつくのでした。

「全くお氣の毒ですが、こんな風になられてからは、お助けのしやうがありません。」
「そんな事を言はないで……　先生はお醫者様じやないか。
何とでもして助けて下さい。私がこの通り賴みますから……。」
母親は手を合せて、醫者を拜むのでした。
醫者は困り果てゝ、逃げる樣に歸つて行きました。
老母は我子に取縋つて、
「要作や、要作。
お前は私を殘して何故死んだ。
賴みじやもう一度生き還つて呉れ。
死ぬなら私もつれて行つて呉れ。」
と、要作の死骸に取縋つて泣き入りました。
この時照代は何處から來たのか、村人をかき分け、老母の傍へ寄ると、

「小母さん、悲しむ事はありません。
吃度生き還らせて上げますから……。」
「おゝ貴女は八幡のお孃樣。
要作はこの通り死んで終ひました。
私はどうすればいゝのでせう。」
「まあ、そんなに悲しまないで、落着いてお出でなさい。
大丈夫です。吃度生き還らせて上げます。」
照代が不思議な事を言ふので、村人達は、要作の死體から少し遠のいて、樣子を見てゐると、
照代は近づいて、頭から足の先迄靜かに撫でゝ、胸の邊りを押へると、につこり笑つて、
「座敷へ寢かせて、お布團を溫く被せて寢ませておゝきなさい。
間もなく息を吹き返しなさるでせう。」
と言ひをいて歸つて行きました。

村の人達はその後で、照代の言ふ通り家に伴れ込み、布團を被せて寝かせてはおいたけれど、老母を慰め乍ら葬式の相談を始めました。

その中要作は、いつの間に呼吸を吹き返したのか、むつくり起上つて、

「お母さん。お母さん。」

と呼びました。

傍についてゐた母は、驚喜して、

「おゝ要作、お前生き還つて呉れたか。」

と叫びました。

その聲に驚いて、村の人達が寄つて見ると、死んだ筈の要作が生き還つて床の上に坐つてゐます。

「お前、死んだと思つたのに、生きかへつたのか。何んといふ不思議な事だらう。」

「これは八幡の照代様のお蔭だよ。魂を取戻して下すつたのだよ。」

みんなが口々にこの奇蹟を讃えました。

新生命

要作の生命が復活して十日ほどたつた或日、同じ村で左門といふ漁師の妻が、豫てから姙娠してゐたのが、月滿ちてお産にかゝつたけれど却々の難産で、二日二夜苦んでも生れません。

醫師も産婆もかけつけて、一心に手當をしましたが、どうしても生れません。

仕方がないので、五里も離れた町から、産婦人科專門の醫師を迎へて、診察を受けると、

「逆兒で、しかも餘り母體の中で大きくなり過ぎたので、完全に生ませる事は出來ません。かうしておけば、母親の命を失ひますから、子供を犧牲にして、切り出すより外に方法は

ありません。」
と言はれます。
「折角出來たものを、惜しいけれど、親の命には代へられませんから、では切り出して貰ひませうか。」
左門は暫く思案しましたが、周圍の人とも相談の上で、躊躇決心すると、醫師にその處置を賴みました。
躊躇醫師はその手術にかゝらうと、準備を終へました。
とその時、誰か知らせたのか、突然照代が入つて來ました。
「あら八幡の照代様。」
と人々が驚くのもかまはず、照代は、
「お產が思はしくないんですつてね。一寸お見舞させて下さいませ。」
と言ひ乍ら產室へ入つて行きました。そして醫師に向ひ、

「先生一寸お待ち下さいませ。
私が產ませて差上げますから……。」
と申しました。醫師は驚いて、
「え？何ですつて？
貴女は一體どなたですか。」
と尋ねました。
左門は
「あのこの方は、八幡さんのお孃様で、照代様と仰有る方でございます。」
「はあ、さうですか。
それで貴女は、この方を無事にお產をさせると仰有るのですか。」
「はい、生れる様に思ひますから、一度手當をさせて頂いて見ます。
そしてどうしてもいけなかつたら、先生にお願ひしても、遲くはございませんでせう。」

「さうですか、ではお願ひしませう。」
醫師は訝しく思ひ乍らも、手を引いて見てゐました。
照代は產婦に近づくと、頭から體全體を靜かに撫で、最後にお腹に手を當てゝ、何事か祈ると、今迄苦んで齒を喰ひ縛つて、苦惱してゐた產婦が次第に靜かになつて、苦しまなくなりました。
そして暫くうつら〳〵と眠り初めました。
傍にゐる人々は心配して、
「眠つてはいけない事はありませんか。」
「このまゝ呼吸を引取りはしませんか。」
と心配さうに尋ねます。照代はにつこりして、
「大丈夫です。女が子供を生むといふ事は、生理的自然の現象です。
屹度今に樂に產れますから、皆さん騷がないで、靜かにしてゐて下さい。」

と人々を押鎭めておきました。

慕ひ寄る人々

すると二十分もたゝない中に、產婦は再び陣痛を五六回訴へたと思ふと、間もなく安らかに大きな赤ん坊が生れました。
しかもそれは可愛いゝ、玉の樣な男の子でした。
「おゝ待つてゐた、男の子が生れた。」
「ほんに照代樣が來て下さるのが、もう少し遲かつたなら……。」
と言ひかけて、口を噤んで終ひました。
それは醫者が來てゐる事に氣がついたからでした。
醫師はきまり惡さうにしてゐましたが、でも照代に對してはつきりと、

「全く結構でした。しかしこんな不思議な事はありません。
これから若し、かうした難産の方がありましたら、手術しない前に、貴女に是非來て見て頂く事に致します。」
と言つておいて、器機を纏めて、歸つて行きました。
後に殘つた人々は、唯嬉しいのと、餘りの不思議さに、口も利かれません。
左門は手を突いて、
「お孃樣、貴女のお蔭で親も子も救つて頂きました。
殊にこの子のためには、貴女は命の親樣です。」
と言つて喜びました。
これが又村の評判になつて、一頻り噂の種になりました。
不思議な事には、何處のうちに病人が出來ても、照代が行つて、少し手當をすると忘れた樣に治ります。

それだけでも不思議ですのに、天氣の事でも、照代が
「明日の午後二時から、雨が降つて海が暴れますから、皆樣お氣を付けなさいませ。」
と注意すると、必ずそれが適中します。
又或時この村へ長い間、魚が入つて來ないので、漁がなくみんなが困つてゐると、濱へ出て來た照代が、網元に、
「明日は大漁ですから、うんと網を入れなさい。」
と言ひました。漁師達は半信半疑乍ら、有りつ丈の網を入れておくと、恐ろしく魚が繫つて、珍らしい大漁でありました。
「八幡のお孃樣は人間じやない。
神樣に違ひないよ。」
「さうだ。神樣だからあんなに何でもよく分るのだよ。」
果はみんなが照代を神樣扱ひに致しました。

又その年の秋になると、田の稻に大變な浮塵子がつき、畑の作物にも蟲がついて、どうにも仕方がないので、村人達は減收を悲しんで、禁厭をしたり、お祈りをしたりして、驅除の方法を講じましたが、何の効果もありません。

村人達が寄り集つて困り果てゝゐる時、照代がやつて來て、

「こんな蟲位、譯なく驅除して終はれます。何方かすみませんが、奇麗な水を汲んで來て下さい。」

と言つて水を汲ませ、その中に鹽を入れて、自分の靈氣をこめ、神に深い祈りを捧げてから、道端にあつた笹の葉を取つて、その水で作物の方を清めますと、怖ろしい程蔓つてゐた害蟲はすつかり取れ、稻も黍も粟も、その他の作物も、生々として力がついて參りました。

村人達は驚き呆れ、軈て

「八幡の照代様。」

とは言はないで、

「八幡の生神様。」

と呼ぶ様になりました。

でも照代は少しも誇りません。

いつも何事もなかつた様な、凉しい顏をしてゐました。

寶　島

照代の噂は次第に高くなりました。かくして二年三年とたつに隨つて、近鄕近在から、照代に救ひを求めに來る人が夥しくなりました。

兩親も捨てゝおかれなくなつたので、或日照代に向つて申しました。

「照代、お前が色々の人を助けて上げるので、みんな喜んで毎日救ひを求めに來られる事は、誠に結構だと思ふけれど、この家では何かにつけても、都合が惡い事もあるだらうから、一そ

何處か別の所へ、莊嚴なお宮でも建てゝ、そこで心委せに世の中の人を救つて上げる事にしたらどうだらう。」

と父が言ふと、母も

「私もこの間から、さう思つてゐるのでございます。」

「何處か氣に入つた所があれば、お前が自由に人を救つて上げられる樣、一軒建てて頂くといゝと思ひますよ。」

照代は喜んで、

「ではお言葉に甘へてお願ひ致しますが、こゝから凡そ三里程離れた海の中に、まだ昔から誰も住んだ事のない、美しい島があります。

それは周圍が一里もない程の小さい島ですの。」

「それは何といふ島なの？」

「名はありませんが、それは〳〵景色のよい島でございます。

その島をお父さんの力で、私が世の中の人をお救ひする聖地として頂いて來て下さいませんか。」

「無人島なら、縣へお願ひしても、それ程澤山お金を出さないでも、拂ひ下げて下さるだらうが、何處にそんな島があるのかなあ。」

「ではお父樣、私が一度御案内しませう。」

「お前が一緒に行けば、それに越した事はない。

近い中に舟の用意をして出かけて見やう。」

それから三日程後、親子四人、穩かな海に舟を浮べ、元氣のよい舟子に櫓を漕がせて、東へ〳〵と進んで參りました。

照代は舟からじつと邊りを眺めてゐましたが、軈て

「お父樣、あの島でございますわ。」

國彥も澄江もその方を眺めますと、矢張りそこに美しい小さい島があります。

國彦は何度もこの邊を通つた事がありますが、曾て一度も見た事のない島です。
「貴方達あの島を知つてゐたかね。」
不思議に思つて、國彦が尋ねて見ても、舟人達は首を傾げて、
「何でもこの邊に小さい島があつたとは思ひますが、あんな島は知りませんでした。」
と答へました。

浮べる淨域

間もなく舟は岸に着きました。
上つて見ると遠くから見たとは違つて、一層島は大きく美しく、神秘的で、自ら清々しい感じが致します。
島の中には、濱千鳥以外に、名も知らぬ美しい鳥が、木々の枝を渡つて、樂しさうに囀つてゐます。

不思議な事には、島の裾は、周圍何町といふ程、海から浮上つた直後の樣に草もなければ土もなく、岩石や礫や砂や貝などが見えてゐます。
國彦は不思議に思つて、
「變だな。この島は今海から生れて出た樣に見えるが、違ふかな。」
舟子達も同じ樣に驚いたらしく、
「あの邊迄は、海の水に浸つてゐた痕があります。」
「さうだ水際がすつかり分つてゐる。いつこの周圍は浮上つたのだらう。」
照代は笑つて、
「一昨日から浮上つたのです。
まだこの島は幾らでも大きくなつて、終ひには本州へも四國へも陸續きになる樣に浮上つて來ます。」

「本當かい、照代。」
「本當ですわ。
でもお父様、必要に應じて生れて來るのですから、そんなに早いことはありません。」
照代は平氣でこんな事を申しますけれど、國彦夫妻は生みの親であり乍ら、夢に夢見る樣な心持で、照代の言ふ事が半信半疑でございました。
しかし國安は無邪氣なもので、
「お姉樣は偉いよ。日本一の豫言者だ。
或は世界一の豫言者かも知れない。
村の人達はみんな、生神樣だつて言つてゐるよ。
學校の先生も言つてゐたよ。
お姉樣は、お父樣やお母樣や、お祖父樣御祖母樣の願子だから、八幡樣の生れ代りだつて。
だから女でも男勝りで、今に外國と戰爭が始ると、神功皇后樣みたいに男の樣になつて、海

で戰へば、外國の軍艦なんかみんな負かして終ふし、空から來る飛行機なんかは、來るのも來るのも皆、神風で吹き落して終つて、日本の國へ敵が攻め込まない樣に守る力があるだらうつて。
そして天皇陛下の御稜威が、世界中に輝く樣にお手傳ひを申上げるんだ。
そのために神樣が、生れ變つてゐらしたんだから、人間じやない。
だから小さい時から、何だつて分つてゐた。
それから八年も神樣の世界へ行つて、神樣になる事を敎へられたんだから素晴らしい力が出來たんだ。
だからお姉樣には、どんな事だつて、出來ない事はないんだつて。
みんなでさう言つてゐたよ。」
國彦は笑つて、
「先生方がそんな事を言つてゐらしたかい。」
「村の人もみんな言つてるよ。神樣だ神樣だつて。」

得意になつて、話してゐる國安の話を聞くと、照代は心で可笑しく思つて微笑みました。

「この子は何も知らない。

兩親も何も御存じがない。

唯それは、私の靈力の一端を知つて、こんな事を言つてゐるのだけれど、私が今本當の靈能力を出して、忽ち雲を呼んで空に飛んだり、遠くに見えるあの島この島へ移つたりしたら、驚いて肝を潰して、我子乍ら怖ろしい樣にさえ思はれる事だらう。」

と泌々思ふのでした。

照代は滿足して島を見廻ると、

「お父樣、この島を拂下げて頂いて、私に與へて下さいませ。

そしたら名前は寶島とつけますわ。

お宮はこの邊に莊嚴に南向きに建てゝ下さい。」

「だつてお前、こんな離れ小島へお宮を建てゝ、お前一人で來たとて、どうして人が來るものですか。」

「どんな不幸な人も、身に病を持つ人も、必ず治して健やかな體にして上げる事が分れば、日本中は愚か、世界中からでも、救ひを求めて來ます。」

國彥は不思議に思ひ乍ら、

「お前がさう考へてゐるのなら、お前の言ふ通りにして上げるけれど……。」

「すみません。色々御心配をかけまして。」

寶島を聖地と定ると、國彥は縣に願つて、早速拂下げを受けました。そして照代の言ふが儘に、材料や人夫を運んで行つて、お宮や住家を新築し始めました。

かうして聖地の準備を父に委せておいて、照代は又一人忽然として家を出ました。

湯島の光明館といふ、大きな學生專門の下宿に、昨日から世にも稀に見る、美しい女中が參りました。

一見すると、十八九にも見えますが、もう少し年が過ぎてゐるかも知れません。

その姿顏容は、東京の市中にも、一寸見る事が出來ない樣な麗人です。

學生達は驚嘆して、

「こんな下宿なんかへ、あんな素晴らしい美人が、どうして來たのだらう。」

「全く不思議だね。あの姿容品格などから考へても、どうしたつて唯物じやないよ。」

「こんな下宿の女中なんかにしておく樣な代物じやないよ。」

「僕おうたさんに聞いて見たら、口入屋から紹介して來たと言つたよ。」

「全く奇怪だね。」

「兎に角あゝいふ美人に、一遍でもお給仕して貰つて、食事をしたら、僕は滿足だよ。」

學生達は無邪氣な事を言つて、大騒ぎをしてゐます。

その麗人は誰でもない、數日前故郷から姿を消した照代でした。

照代は年增に見せる事も、若く見せる事も、自由に出來る力を持つてゐますから、思ふ事があつて若い小娘になつて、好んで下宿屋へ奉公に來たのでした。

そして純眞な心で、學生達の面倒を見、出て行つた後の掃除なども、奇麗に念入れて致しました。

その間には學生達の本箱に竝べられてある色々な書物など、悉く讀み取つて終ひました。

表面眞面目さうに、威張つてゐる學生が、その實ちつとも勉强してゐないのを見ると、言ひ知れない物悲しさを感ずるのでした。

それより、肉身の親の、尊い慈悲心を弄び、血の涙や汗の滲み出る樣な金を、必要以上に取寄せて、不純な巷を流れ歩き、無用な事に金を費し、不衛生な生活をしては、健康を害ひ、肉體を患つて、二重三重の苦勞を親兄弟にかけ、惡友と交はつて、野獸的思想に墮落して、健全な心身を害して、唯智惠のみ働く、惡魔の樣な存在になつて、親を苦しめ、世の平和を害ふ

様な人々のあすこから、此處から現はれる事を知つて、悲しまないではゐられませんでした。

學生達の一日の生活は、規律のない者が多く、純眞な仰信的信念を持つ者は極めて少く、單純な唯物主義者で、よく偉かつて理窟を言ひます。

女中などに向つては、始終無理を言ひ、我儘を言ふのです。

食事の度毎にうまいとか、まづいとか、小言を言ふ者が多く、心から感謝して箸を取る學生などは滅多にありません。

冗な事に飲食して、金に困ると、參考書でも着物でも、時には夜具迄も金に代えてすまし込んでゐる樣な不良な學生もあります。

照代は思ひました。

教育の組立が土臺から誤つてゐる。

最後の仕上が徹底して不純に仕上つた人々が、世の中へ出て、己れの不純な誤れる力を種として、虚僞の華を咲かせ、實を結ばせる時、世の中はどんなになるだらう。

今現に不純の種が伸びて、迷ひの華が咲いて、不幸の實が成つて、住み惡い世の中になつて、人はお互に苦んでゐるのだ。

無冥の世界にのた打廻つてゐる。

この上惡魔がこの夥しき若人達の魂を曇らせ奪つて、間違つた不正な道に踏み迷はせたら、最後の地上は何となる？」

と考へました時、深い決心をして、その家を去りました。

神か人か

照代はそれから次々に變身自在思ふ儘なのを幸ひ、帝都のあらゆる階級の家庭に、又は官公署に、會社に事務所に、殘る方なく尋ね廻つて、その實生活を目に耳に感情に取入れて、人間としての常識を己が知能として蓄へました。

或時は路傍の露天商人と交り、微妙な生活を味つたり、或時は銀座の不夜城の歡樂の巷に姿を現はして、財寶を湯水の友く濫費して、魂の拔けロボットの樣に他愛なく、ふざけ戯れ、又は踊り狂つてゐる、不良な有閑紳士や夫人や、青年男女の人々の、不純な心と姿の生活を見る事もありました。

又、或時は大學、中等學校、小學校の教室や教務室に現れて、教育者の實生活を見凝めてゐたり、又或時は教會の中に入つて、數多の信者と共に、美しい聲で讃美歌を歌つて、教へを聞いたり、梵鐘殷々として響く、佛閣の廣間に法城の燈火を見凝めつゝ靜かに布教師の說教に耳を傾けてゐる事もありました。

或時は又、大會社の機械場の中に、數多の從業員に入混つて、默々として、働いてゐる時もありました。

又事務所の席に就いて、タイプライターを打つたり、書類の整理をしてゐる樣な姿も見受けられました。

又或時はエプロン姿に、古い草履を穿いて、大會社の廊下や便所洗面所などを念入りにお掃除をしてゐる小使婦の姿として見る事もありました。

昨日の見すぼらしかつた姿と打つて變つて、今日は別人の樣に目覺める樣な美しい姿で、大百貨店の賣場で、こぼれる樣な愛嬌で客に接し、他の店員事務員を驚かすばかりの成績を上げたり致しました。

だが何處が落着いた住居ともなく、昨日は東、今日は西、明日は南、明後日は北といふ樣に心委せにどんな所へも入り込んで、總ての階級の人間の實生活といふものを、その身に體驗を得るために、修業を續ける照代ではありましたが、照代の神出自在の出現は、唯世にも不思議な人、美しい人變つた人といふだけの、深い印象を、總ての人々の魂に打込んだゞけでなく行く先々で接する者目に觸れる者の魂に、一生忘れる事の出來ない印象を殘してゐました。

照代はよく人の爭ひを跡方もなく、和やかに解決しますので、心に惱みを持つ者、身に病を持つ者は一人も殘らずその魂その身を清められ、救はれるのでありました。

様々な境遇のために、心誤つて罪を犯してゐる者には、その妄念を去つて、新しい生命を與へてやりました。

照代の現はれた所には、一として幸福を齎さないものはなく、餘光を殘さぬ所はありません。

ために幻の麗人として、各方面の人々から不思議がられ、その德を慕はれて、誰からも皆

「今一度此の世であの人に逢つて、本當の敎へが聞き度い、眞の幸福を摑ませて貰ひ度い。」

と叫ばしめ、

「あの人は神か天使か、唯の人とは思はれない。」

と全國の人々から夢の中の人、幻の中の麗人として慕はれて居りました。

かくして照代は、敎育の殿堂に、あらゆる宗敎の法城に官公署や銀行會社商店等に、殘る方なく實情を體驗したのみか、上中下あらゆる身分職業の家庭に入つて、資本主と勞働者、主人と雇人、地主と小作人、賣る者と買ふ者、夫と妻、親と子、借主と貸主、奪ふ者と奪はれる者、總て立場の變つた者の心境感情態度常識等に就て、細やかに學び取つて、人間社會に於ける生

きた修行を續けました。

そして漸くその目的を終ると、懷しの父母待つ家に、三年振りで歸りました。

寶島を發見して、父母に聖堂の造營を委託しておいて、忽然として旅に立つた照代は兩親が待てど暮せど歸つて來ません。

村人や親戚の人達も心配して、

「お孃樣は一體何處へお出でになつたでせうか。」

「又神隱しに逢つて、この世でない世界へ行つてお出でになるのではないでせうか。」

と噂するのでした。國彥は、

「今度は神隱しではありません。

始終手紙は寄越します。
だが居る樣が三日と定つてゐないと見えて、住所もゐる家の宛名もなく、唯無事でゐるといふのだけの知らせですから、こちらからたよりをする事も出來ませんので、うちの事はよいとしても、寶島の方の仕事は、どういふ風にすればよいのか、相談する事も出來なくて困つてゐます。」
「左樣でございますか。今度も色々と人のために御修行なさつてお出でゞせうが、全く不思議な方ですね。」
「實際あゝいふ子供が出來ましては、親としてもどうしてよいのか、判斷がつきません。」
「でもお結構でございます。
始終人を幸福にお救ひになる事ばかりに、力を入れてお出でになりますから……。」
「その事は私達も結構だと思つてゐますけれど、早や今年で三十三になりますから、あんな生活をしてゐてよいのかと思ふと、親の身になれば、心配にもなりますが、それかと言つて普通の人間と全く變つてゐますから、再び親の口から結婚問題など言ひ出せませんし、困つたもの

でございます。」
「しかしお孃樣は全く普通の人間の生活から超越してゐらしやるのですから、親だからと仰有つて色々通俗的な事を御心配なすつても、お聞き入れにならない事は勿論です。
却つて惡い結果になるといけませんから、お孃樣のお心に委せておいた方が、結局お爲によいのではございませんか。」
「私共もそれを思ひまして、人が見ると氣狂ひじみてゐませうけれど、あれが言ふがまゝに、あの離れ小島へ澤山材木や材料を持つて行つて、三年も前から普請をしてゐるのです。
時々考へて見ると、一體自分は何をしてゐるのか、ちと心が變になつてゐはしないかと思ふ事さえあります。
何にせよ本人は、暫く旅行させて呉れと言つたまゝ、影も形も見せないのです。
それだのに、海の中の離れ小島へ一生懸命でお宮を建てゝゐるのです。
子に迷つてゐる親の因果と、自分達は納つて居れるとしても、世間の人は何をしてゐるのか

と、大方笑つてゐらつしやるでせう。」
「いゝえ、それどころではありません。
照代様の事は、この界隈では、一人も知らぬ者はありません。
世の中の人を救ふために、尊いお宮を御造營になるのは、結構な事だと、みんなが喜んで待つてゐますが、唯お嬢様がお見えにならぬので、且那様や奥様の御心配が思ひやられると言つて、お噂申して居ります。」
「有りがたう。しかしこれも因縁ですから、どうにもなりません。
唯自然に委せて、成る様にやつて行くより外仕方がございません。
これから又寶島へ參ります。
普請は大體出來上つたのですが、これから先の事は、どんなにしてよいのか、照代が來ないと分りません。」
と言ひ乍ら、國彦は寶島へ出て行きました。

その夕方照代は忽然として、我家へ歸つて參りました。
今の今迄照代の事を案じてゐた澄江は、夢ではないかと喜んで、
「まあ　照代、歸つて來てお呉れなの？」
照代は微笑んで、懐し氣に母の顔を見上げ、
「お母様、永い間御心配をかけてすみませんでした。
只今歸つて參りました。」
「まあ無事で歸つて呉れて嬉しかつた。
お父様がどんなに心配してゐらつしやるか知れません。」
「本當にすみませんでした。」
「それにしても貴女は今迄、何處に何をしてゐました？」
「別にこれとして定つた事も致しませんでしたけれど。
でも今度は始終お便り致しましたので、無事でゐる事だけは分つて頂けましたでせう。」

「えゝ、三日にあげず手紙を寄越してお呉れだつたから、貴女が無事でゐる事は分つてゐたけれど、こちらから便りをする事が出來ないので、それがどんなに心細かつたか知れませんよ。」
「でもお父様もお母様も、國安さんも御無事でよろしうございましたわ。」
「お蔭でみんな丈夫ではゐましたけれど……。」
「それにお父様には、大變な御骨折りと、御心配をかけましてすみませんでした。」
「お父様は今でも寶島へ行つて、普請の世話を眞劍でしてゐらしやるのですよ。」
「有りがたうございました。
お蔭様で大變見事に出來まして、嬉しうございますわ。」
「あら、もう行つて見て來たの？」
「私まだ參りませんけれど……。」
「ではどうして分るの？」
「それは分りますわ。お母様。」

「では、何か信仰の力で、魂が飛んで行くとでも言ふ樣な事で分るのかえ。」
照代は笑つて、
「その事はお母樣にお話すると、尙更不思議に思はれまして、とても今のまゝではお信じになる事は出來ませんから、申上げない方がよろしいと存じますわ。
唯お母樣、これだけ申上げておきます。
私修行のお蔭で、只今は何處に居りましても、お父樣やお母樣がお出でになるうちの事、坊やの事その他何でも分りますの。
はつきり見えるのです。だから一寸でも心配な事があると、すぐ飛んで來ますけれど、お變りがないものだから、安心して次々に歩いて居りました。
この村で亡くなつた方も、生れた子供も、幾人あるか顏も名もちやんと知つてゐますのよ。」
と數へて見せると、澄江は驚いて、
「まあ照代、まるで神樣の樣じやないの？

そんな事を言ふと、我子でも何だか、傍にゐるのが勿體ない樣な氣がして仕方がないよ。」

「そんな事を仰有いますから、私何もお母樣に申上げ度くないのです。

寶島の事でも、お父樣がどんなに眞劍で力を盡して下すつたか、どんな風にお宮が出來てゐるかといふ事を、私はつきり見てゐます。

もう殆ど出來上つて、お父樣がいつも、

お宮は出來たけれど、これからどんな風に內部の設備をしたらよいか。

私がどんな品物を欲しがつてゐるかと、始終心配して、私の歸るのを待つてゐて下さるから、餘り御心配かけてはすまないと思つて、歸つて參りましたのよ。

お母樣、私これから寶島へやつて頂きますわ。」

「では私も一緒に行きませう。」

親子は連立つて寶島へ船を急がせました。

聖教の巻

聖女の瞳

寶島の頂きには、國彦が三年かゝつて懇ろに造營した、美しいお宮が出來、照代の希望通りの聖教殿も見事に出來上りました。

餘り大規模ではないが、教へを學ぶために集る人々が、魂と身を慰はする、瀟洒な家も出來ました。

照代はこの建物の名を聖壽莊と名付けました。

山の裾の濱邊にも簡單ではあるが、鞏固に築き上げた、乘船場も出來上りました。

秋も漸くたけなはに入つた九月十八日に、照代は近郷近在の人々に知らせて、盛な寶島の島開きを致しました。

豫て照代の事は、噂が高かつたゞけに、又國彦が眞心こめて、三年もの年月かゝつて、我子

のために、寶島に聖敎の殿堂を造營したといふので、それに敬意を表し度いといふ眞心や、中には好奇心も手傳つて、當日は豫期しない程の人が、寶島へ押かけて參りました。

時刻を違へず、お宮へは天照皇太神宮を初め奉り、八幡神社その他、あらたかな神樣の御神靈を祝ひ鎭めました。

この祭には照代の生れた村の社司初め、大勢の社司を迎へて、嚴かな式を行ひましたが、御神靈納めだけは、他に例のない方法で、照代自身が奉仕致しました。

この盛な式がすむと、招待された、人々は、夕暮迄樂しく面白く、歌ひ、踊りつゝ、祝つて居りましたが、軈て三々五々、島の岸邊に繫いであつた、舟に乘つて、西へ東へ思ひ〳〵に歸つて行きました。

後に殘つたのは、兩親と國安と主なる親戚村の有力者二三人だけになりました。

夜に入ると邊りは淋しく、他の島は遠くに、ぼんやりと浮いて見えます。

燈火はチラ〳〵と瞬いて見えますけれど、この島も寶島からは遙かに遠く、舟に依る外渡つ

て行く便利はありません。

風が相當强くなつたので、海はごう〳〵と音を立てゝゐます。

一同は言ひ知れない寂寥を感じて、或人は言ひました。

「こんな海の中の離れ小島へ、こんな立派なお宮や、御殿を建てられた事はよいが、これから先照代樣お一人で、お淋しくはありませんか。」

「私達もそれを心配してゐるのです。

けれども照代が是非この島へ住み度いといふ、豫ての希望だものですから、親心でこれ迄に建築はしましたけれど、これから先どうなるのか、勿論小間使は一人や二人つけておくつもりですけれど……。」

澄江は夫がさう言ふのを聞くと、

「都合に依れば、私が始終こちらへ來てゐてもよろしいけれど……。」

と言ひました。この時照代は世にも輝かしい瞳をして、一同を見廻して、はつきりと言ひまし

た。

「皆様御心配下さいますな、

この島は餘り大きくありませんけれど、神様が神代に、一番先に地上にお生みになつた尊い聖地でございますから、天祖様始め、尊い天つ神様が、お鎭りになつて、御守護下さいますから、如何なる所よりも、幸福で樂しい安住の島でございます。

だから私は一人でも結構でございます。

しかし軈てこの島が狹くなる程、人が尋ねて參ります。」

それを聞くと、社司は言ひました。

「照代様、幾年かの後に次第に敎へが擴まつて、この島を慕つて來る人が殖えて狹くなつたらどうなりますか。」

「人足が繁くなるにつれて、天祖様はこの島を、次第に大きく育てゝ下さいます。

そして軈ては陸續きで、四國へも本州へも行かれる様になりませう。

天祖様から御覽になれば、この島も人間と同じ様に生き物です。

唯、目に見える程早く變つて行かないだけでございます。そしてこの島は、海の中に姿をかくして、頭だけ出してゐるか、又は體を次第に水の上に出して來るかといふだけで、水面の上にゐても下にゐても、同じ事でございます。

日本は本土も四國も九州も皆、この島の様に浮島です。

歐米大陸その他何れも、大小の差はあつても、何れも皆浮島である事に違ひはございません。

だから私が、この島を選んだといふ事は、ちつとも不思議な事ではありません。

形は小さく見えても、本土に通じ、根は世界に張つてゐるのでございます。」

と言ひ終ると、につこり微笑みました。

その輝かしい目の光、莊嚴な態度は、常の日の照代とは全く違つてゐましたので、兩親初め他の人達も、思はずその威光に打たれ、心服して終ひました。

兩親始め身近の者さえ、離れ小島である、こんな所へ誰が訪れるものかといふ様に、初めの

中は考へられてなりません。

それだけに人知れず憂慮して居りましたのに、その島開きのあつた翌日から、顔を知つた、近郷の人よりも、名も知らぬ人々が、この島へ尋ねて參ります。

そして禮を盡して救ひを乞ひますので、照代は一人の時も數人の時も、數十人の時も變らぬ樣に懇ろに聖教を說き、患ひを身に心に持つ者は、綺麗に取除いて、新生命を授けて返しますので、忽ちの中に全國へその噂は擴がつて、島を開いて、一年もたゝない中に、聖教殿も聖壽莊も狹くなつて、增築をしなければならないといふ樣な狀態になりました。

これを見ると父も驚きの眼を瞠つて、

「矢張りあらたかな神樣の御守護に依つてかういふ事になつたのだ。有りがたい事だ。勿體ない事だ。

これから先の事は、人間の力では判斷が出來ない。」

と言つて、澄江と共に驚嘆もし又安心しました。

照代は道を求めて集る人のために、清淨な心、嚴肅な態度で、朝夕懇ろに聖教を說き、救ひの業に力を盡しました。

しかし照代の聖教は、千變一律であつて、人間生命の總括的眞理を殘る方なく說破して、如何なる人も、この教へを聞けば、自我の妄念は消滅して、眞の魂に悟りを開き、必ず新しい眞生命を得て、その心は光明に滿ち、身は健康に溢れて、生命の光を放ち、喜び勇んで新しい幸福な未來建設のために、立上らぬ者はありません。

照代の說く聖教はどんな階級の人にも分り易く懇ろな言葉で終始してゐました。

天恩

「世の中に人として生を享けた者、誰一人として、我が身の幸福を願はない人はございません。又誰も不幸といふものを我から望む人はないのでございます。

それであり乍ら、常に我が望んで止まない仕合せを、身に受ける事が少く、逃れ度いと思ふ不幸が次々にその身に迫りこだはつて來るといふ事は、誠に不思議な事ではございませんか。

とかやうに申しましても、よく〳〵考へて見ますと、これは不思議な事はありません。

それでは何故かと申しますと、人は眞劍で心に幸福を求めてゐますけれど、その實幸福を我身から遠ざけて、好まぬ不幸を集め引寄せる樣な行を絶えず續けてゐるからでございます。

世の中の生物は、植物も動物も總て、種があつて芽生えるのでございます。人間も同じ事でございます。

必ず蒔いた種が生えるのですから、惡い種を蒔けば、生えるものは惡いに決つてゐます。

よい種を蒔けば、善い物が生えるのは、當然でございます。

それと同じ事で、日常の總ての事でも、己れから蒔いた種が芽生えるのでありますから、よき種、惡き種の力に依つて、幸と不幸が芽生えて參ります。不親切不眞面目、僞りといふ樣な、誠でない心の種を蒔いておいて、本當の幸福の實を求めやうと思ふのは、無理な願ひです。

間違つた種を蒔けば、必ずそれが芽生えて屹度不幸といふ華が咲き、實が成るのです。押しなべて、不幸の實を蒔いても、華の時代は可なり美しく見えるものでありますが、實になつてからは、價値がありません。

それと反對に眞心から、親切に正しい清い種を蒔くと、それが軈て、純眞に力强く、性根からすつきりと伸びて、花も清く麗はしく咲き、薫りもよく、その上冗のないよい實を結んで行きます。

これが眞の幸福といふもので、花でも果物でも、野菜物でも穀類でも、同じ事ございます。

まして人間の生命の花といふものは、何よりも先づ眞理が種でなければなりません。

これを皆さん、はつきりお悟りなさいませ。

若し皆さんの中で、心に不滿不幸惱みがあられたり、五體に病といふ患ひがあつて苦しむ人は、その現れた場所と痛みに依つて、患ひの名こそ變れ、その惱み不幸の出たもとは、一つの種であります。

それは嘘といふ、不純な種から始つて、色々な順序を經て、遂に惡の華が咲いて、不幸の實が成りかけたのです。

それだから、その身の不幸から惱みから、逃れ度いならば、苦しさの餘り、無我夢中で藻掻いたり、他に求めて焦つたりしないで、一刻も早く生命の種を取り替へてお終ひなさい。

種さえ眞心といふ眞理に取替れば、生命の性根が變るから、心が忽ち清々しくなり、五體の不純が清め去られて、麗はしく健やかな生命に屹度なります。

これは明らかな天則であります。

この一大事を知らずして、永い間過去の人々は、不幸に惱まされて來たのです。

このまゝでおけば、これから後の世も、この不幸の種に數限りなき人が、惱まれ、苦しめられる事でせう。

皆様は一刻も早くこの眞理を悟つて、不幸といふ運命から離れて、幸福な人生に命をうつして、輝かしく生きて下さい。

お分りになりましたでせうか。」

「一寸お伺ひ致します。

大變御教へを尊く拜聽致しましたが、不幸と幸福の種の出場所を明らかにお說き聞かせをお願ひ致します。

それでないと私共凡夫の者にははつきりと、眞生命の種の事が分り兼ねます。」

それを聞くと照代は、優しく微笑み、その瞳は美しく輝きました。

親と子

「幸福の種の出所に就て、お尋ねがありましたが、誠に結構なお言葉でございます。

世の中の人は誰でも、我が身といふ事については、餘程一心になつてゐます。餘りにも我身を愛し大切に思ひ過して、却つて我身を誤り、害ふ事が多いのでございます。

今申しました、不幸と仕合せの種の出所を、お知らせする前に、不幸の種が芽生え伸び、働きかけて來る有樣を申して見ませう。

人は誰でも我が身を我物と思ふために、我が身によい着物を纏ひ、よい物を食べ、美しい家に住み度いと思ひ、又我が身を愛するがために、樣々な慾心を生じ、之を働かしめるために、その力が我が身を守る程度を越え、人の幸福を奪ひ、人の魂や體をも傷け害ひ、世の中に禍をする樣な事にも及びます。

これ皆我といふ囚はれた心から生じた慾心が、かゝる働きを行ふために、人や世を害ふのみか、我が身も絶えずそのために、苦しみは絶えません。

この自我といふ怪しき心のために己を正しき生命に生かす事をなさず、不自然不規律不眞面目不誠實な行をするために、精氣も鈍り、眞心の鏡曇り、ためにその身は遊惰になり、虛榮傲慢となり、暴飲暴食を恣にしたり、我儘氣儘な振舞を身に行ひ、心を苛立て、言葉と表情に現はすために、總ての人からもうとまれ、輕んじられ罵られて、信用を失ひ、情誼が薄くなり我も又人を疑ひ、蔑み罵り貪り、不平不滿の心に終始するために、この心に依りて煩悶を生じ、又この心と身の行に依つて、患ひとなりて現はれ、過ちとなつて現れる事が、眞實の姿であります。

かく迄我を惱まし、己を不幸に陷れる、我が心は、何處から來るかと探つて見ると、これは皆もとから來たのではなく、中途から人の生命に飛込んで來た、色々な、幾つかの心が、この禍を起してゐるのだから、その心を取除かなければ、眞生命にはかへられません。

とかう申しても、はつきりお分りになりませんでせうが、分りよく申しますと、皆樣も自身の體をはつきり、我が物だと言ひ切る事が出來ますか。

若し我が物だと仰有るならば、御自身の體を御自身がお作りになつて、御自身が思ふ樣に扱つて、どの樣にも心の儘に働かせて行かれさうな道理でございます。

然るに世の人は、決して自分の肉體を、自分で作つた人はありません。

骨肉五臟八腑の組織はもとより、毛髮一本さえ我が力に依りて、心の儘に作る事も出來ず、

いつの年にいつの月いつの日、どの刻に、何處の土地に如何なる親の子としてこの世に生れるといふ事は、自分の心のまゝには出來ません。又親としても、我が子とは思へど、父も母もその子を生むのに、我子からも人からも、生んで呉れよと、賴まれた事もなく、又我が子に生れて呉れよと賴まれて、前生から約束を結んで、この世に親子といふ因緣に生れ合せた親もなく子もありません。

この事實を思へば、人の命の故郷は、血肉を分けた父母の力に依るとのみ思ふ心も誠ではないのです。

されば人の命は、何處からその源が始つてゐるかと、生れ故郷を調べて見ると、誠に神祕不可思議な力で、人間の心で思ひ及ぶものではありません。

尤も地上に命を受くる、植物動物の如く、人の子として生れるのには、人としての姿、形、魂を受くる種が必要です。

その種の事を父と呼びます。

人の子の父なる人の魂清く、正しくして、その體健かであれば、誠によき種となる事は言ふ迄もありません。

世に優れたる良き種を植えても、土地荒れ痩せて、害蟲などの障りあれば、よき麗はしき種も、健やかに育つ事が出來ず、隨つて麗はしき花咲き、實を結ぶ事はありません。

それと同じく、父は世に優れたる、よき種なればとて、土に譬ふべき母性の體が、不純にして患ひを生じ、健やかならず、心も清く正しからざる時は、純眞にしてまめやかなる幼兒を生む事は出來ません。

何故なれば、その魂は母の精神生活に左右される所多く、嬰兒の五體を作る力は、母性を通じて、體内に送られる、樣々な飲物食物と、自然の力とに依るのです。

母性が強く潔く健やかにて、よき骨となり、肉となり血となり、總ての生命の力となる成分を充分その身に取入れる時は、體内の子は自然なる神の御業に依りて、圓滿完全に育てられ、父母の持つ、よき清き魂の力をそのまゝ五臟神君に受けて、この世に生れて來るのでございま

す。

さればよき子と良からぬ子といふ事も、根本の力は父の種と、母體にある間の胎教に依るものである事は明らかであります。

生れ出でて後の哺み教への力は、その人と成る力の一部分である事を明らかに知れば、今から後誰人もよき子よき孫を生みて、子々孫々君國と共に、彌榮えんと願ふものは、人の子の器として選ばれた親の生命の力を、清め正しくして、いつの時よりも正しく清く尊き器となる事を心掛けねばなりません。」

「次に一寸お伺ひ致します。

親と子の尊い關係と、よき子を生みますのには、父と母のよき器、清く正しく純眞な魂が必要であるとの御教へは、よく分りました。

父と母との力を通して、人の子がこの世へ生れて參ります、眞理をお伺ひ致し度うございます。

天と地

「人がこの世に生れて參りますのには、矢張り神の惠みの力なくしては、不可能でございます。

父と言ふも、その源を尋ねれば、神卽ち自然の力にかへるのです。

唯種のみありたりとも、神の御業に依りて、之を培はずば、人の子の命のどうして生れ出づる事が出來ませう。

種定り母の食したり又飲んだ物の成分が、神むすびの神の御力に依りて、組織されて、人の體として組立てられるのであります。

その食物は何處から生ずるかと申しますと、大地から生み出されるので、大地は總ての生物の母であります。

大地の力の尊とさは、無限無量であります。

こゝに一人の農夫がありまして、如何に懇ろに汗を惜しまず、よき種を蒔き、親切に肥料を與へ、土を耕しましても、土に種を芽生えさせて育てる力がなければ、一粒の種も地上に芽生えは致しません。

これが伸々と土に芽生え、花が咲き實を結ぶのは、自然に大地に、總ての命を哺み育てる力が滿ち〳〵てゐるからでございます。

されば農夫は唯眞心から自然なる力、卽ち神様の御業のお手傳ひをして力を盡したに過ぎません。

ために若し土を耕す農夫が、土を尊ばず愛せず、種をよく選ばず、よき肥料を與へず、親切に耕さぬ時は、如何に廣き土地を持つとも、眞に多くの收穫を得る事は出來ません。

眞心からよき種を選び、之を蒔き土を懇ろに耕し、よき肥料を施し、眞心から汗を惜しまずその作物を劬り培ふ時、土は自然にその眞心を慈しみて、よい稔りを與へて喜ばせます。

これ明らかな眞理でございます。

しかし總て萬物の命は、土の力のみにても、成育は出來ません。

水の力、空氣の力、大空に輝く太陽の御光り、この御力、この大自然の大氣を受けて、初めて健かな生命が育ちます。

土は神代に天祖様の尊い御稜威から、生み出されたまゝ增す事も減ずる事もなく、そのまゝ生き通して、次々に絕ゆる事なく、先に朽ち癈れたる如何なるものをも、よき肥料として、新しき生命を生み出してゐるのでございます。

誠に尊いのは、土の力ではありませんか。

水も亦人の力に依つては、一滴たりともこの世に生じたものではなく、天祖様の御稜威に依つて生れ、そのまゝ絕えず人間初め動物植物が、搔き濁しても汚しても、晝夜絕ゆる事なく、清め清めて、土に滿ちては物の命を育て、地上生物一切を養つてゐるのであります。

水の尊さも、土に劣らぬ力である事を、明らかに知らねばなりません。

又大地に水土の力滿ちても、大空に輝く陽の光りや大氣がなければ、萬物の命は枯れ盡して、

一物も生れず、又育ちません。

御光りが絶えず大地を輝かし照らし暖めるために、總ての生物の命は生れ育てられ、豐かに生かされて參ります。

この事を思へば、太陽は誠に萬物の命の父であり、土は母であります。

かくして土水太陽の力は、如何なる人も目に見、肌に受ける事が出來るために、その力を認め感ずる事が明らかに出來ます。

しかし空氣は人の目に見えるものでないために、尊い力を總ての人に明らかに認められる事が少いけれど、形なくとも空氣は天が下に滿ち〳〵て、萬物の命を養ひ、その生命を司る力を持つてゐます。

人若し僅かの間、土を離れ、水を呑まず、太陽を離れても、直ちに命絶ゆる事はありませんが、空氣を失へば、僅か數分にして、その命は絶えるのであります。

空氣は植物の生命を養ふにも最も必要ですが、殊に動物には寸時も缺く事の出來ぬ大切なものであります。

若し不純な場所に閉ぢ籠つて、汚れたる空氣を吸つた爲に五臟の神君不純となり、氣分を害し、頭痛起り、眼眩む樣な事がありましても、早く氣付いて、窓を開き、新鮮な空氣と換氣するか、自ら出でゝ新鮮なる空氣滿つる場所に身を置き替へれば、忽ち五體清淨となり、氣分清々しく健全なる生命に改まるものであります。大自然の力は絶えず、動物の呼吸作用植物の酸素同化作用に依つて、空氣を新しく清めてゐます。

かく詳細にお話すれば、天地自然の恩德といふ事が、誰方にもよくお分りの事と思ひます。

これがお分りになれば、人の命は天地自然から生れ、魂も天祖樣から明らかに受けて生れるといふ事がお分りになりませう。

天地自然の御業御心に依りて、地上の生命は生れるのであるから、植物又は動物の如何なる姿形に生れても、些かも不足を唱へる事は出來ません。

然るに人は他の動物として生命を受けずして、知能や感情の力を思ふ儘に働かす事の出來る

人間としての生命を與へられて、人間の父と母を器として選ばれ、祖神様の尊き御業に依りてこの世に生れ出でたのであります。

生れて後も、間斷なく天地自然の御恩德の力に依りて命を育てられ養はれ、生かされてゐる自己は尊き神の子であるといふ事が分りませう。

これを悟れば今迄我が身と思つた小我の心は消え失せて、唯麗しき大自然なる、天地の恩物のみに圍まれてゐる、幸多き自己である事を明らかに知る事が出來ませう。それを思へば、父母は肉體を持ち、この世に生きる天地自然の親様に代る誠の生神生佛様である事も分ります。隨つて、親に仕ゆる子の道にも、理窟も言譯もない。

唯生きた神に佛に仕ゆる眞心を以て、盡さねばならぬのでございます。

この眞心が天地自然の親様に捧げる、報恩感謝の眞心で、神の子なる人間のみに與へられた尊い誠の信仰的大信念で、この德が天に通ずれば、神の力に融合して、天地を動かす程の力さえ現はれるのでございます。

若し人が、この眞理を知らず、小さな自我に心迷ひ、大自然なる天地の恩を知らず感じず、總ての天恩物を粗末に取扱ひ、その德を汚し、無益な事に、萬物の生命を害ふ時は、忽ち御知らせが現れて參ります。

又總て神の子なる世の人の命を小我といふ迷ひ心から差別し、様々な邪念邪心、傲慢心に依り様々な行と言葉を以て、人の心を生命を害ふ様な振舞ある時は、その罪に依りて大自然に輝く尊く偉大なる生命を失ひ、自らその心その身は、小我の無冥暗黑世界に墮ちて、苦惱を生じ、人間として生れたる價値を失ひ、未來永遠の幸福をも自滅するのであります。

故に人間の眞の幸福といふものは、假初に集めた金、名譽地位衣食住その他の力で得られるものではありません。

若し人が目に見える物質を我が身に所有する事を、幸福と思つて、不純不自然な心を生じ、非道な行を致しました時は、却つてその求め集め所有したる力に依りて、禍を受け、心を惱まし、身に病過ちを生じます又そのために生命を自滅する人さえあるのです。物質財産等を

所有する事は、決して幸福の條件にはなりません。

人若し己が眞生命を受けたる、天地自然の恩德を思ひ、一信一仰萬物に對し、報恩感謝の一念を以つてその魂清く、行正しく至誠、天道を踏み行つて、小我の世界に踏み迷ふ事がなければ、生るゝから最後の日迄、その身は心も身も淨く清々しく、健やかに天界の神の如く地上に於ける王者として樂しい生命を終る事が出來ます。

報恩感謝の生活は、卽ち眞生命の輝く、眞理の聖道でありますから、誰も皆この明らけく輝かしきこの道を一筋に踏み占めて行くといふ事が誠に大切な事でございます。」

天祖の御稜威

「大變有難いお話を拜聽致しまして、よく天地自然の御恩德と、人間の眞生命の生きる道を明らかに悟らせて頂きました。

先程から天地自然は天祖樣の御稜威から、生れたといふ樣な仰せを承りましたが、餘り畏れ多いと思ひますけれど、御代の初めに於ける、天祖樣の御業について、お話し下さる譯には參りませんでせうか。」

「今迄お話した事は、誰も皆成程と承知して領ける事ばかりでございますが、天地大自然をお生みになりました、天祖樣の御業といふ事は、人間の力で想像も出來ない、遠い神代の事で又御稜威は宇宙の一大神祕であらせられますから、人が聞いても、誠と思ひ信ずる事の出來ない樣な御業であります。

若し天祖樣の御稜威を、眞心に聞き度いと願ふ方は、魂を飽迄淸く正しき、眞澄の鏡として、お聞きにならないと、お分りになりませんし、又天祖樣に對し奉つて、勿體ない事でございますから、よく〳〵お心持を淸めて頂けば、謹んでお話を申上ませう。

この御業が明らかに魂にお分りになれば、皆樣方の生命は、自ら正され淸められて、偉大なお力を發揮する事がお出來になります。」

「有りがたうございます。
私共一同は眞心を清めて拜聽致しますから、是非お說き明しの程をお願ひ致します。」
照代はにこやかに、
「それでは天祖様の御稜威をお說き申上げる私も、又お聞き下さる皆様方も、共に心身を清らかな水で清めた上で、お說き明し申上げる事に致しませう。」
と申しました。一同は立つて井戸に行き、清水を汲んで、その身を清め、清淨なる心持で再び御神殿にかへり正坐致しました。

大宇宙の御光り

「神代の昔、大宇宙の御光りとして、全知全能の力に滿ちてあらせられました、天祖様は、絶えず大宇宙に様々な世界を生んで、お居でになりました。

それは今も昔も變りはありません。
しかし乍ら、他の世界の事を、此處で申しても、お分りにならず、又皆様方に必要もない事でありますから、他の世界のお話は止めて、皆様方又私共の住む、この世界の事をお話申上げる事に致しませう。
天祖様は、初め様々な成分をお生みになりました。
これをお纏めになつて、圓やかな形にお造りになつたのが、地球でございます。
軈てその地球が、天祖様の御業に依つて、山となり野となり、川となり、海となる様にお分ちになつてから、様々な植物の種を、山に野に海にお移しになりました。
すると何もなかつた大地から、様々の形の植物の生命が、地上に伸び出して、榮え初めました。
この御業が終りますと、次には鳥獸、昆蟲、魚といふ様に、大小形も様々な數へ切れない程變つた動物をお生みになりました。

この動物は、先にお生みになつた植物の芽や葉や實や根や莖を食して生きるのを原則とお定めになりました。

かくして地上に植物動物の生命は、非常な勢で榮えて參りました。

この時天祖様は、麗はしき地上の姿を御覽になつて、非常に御滿足遊ばされました。そしてこの地上に榮ゆる植物や動物の生命を支配し、一層うるはしく天上界の様に、樂しく輝かしく生かして行く力のある生命を生み度いものだと思召になつて、天上界にいつも美しく輝かしく樂しく、不幸といふ事を知らずに生き拔いてお出でになる、神様のお姿を種に取つて、身體髮膚の骨組みを遊ばされました。

それから澤山お傍に仕へてゐる女神様男神様にお命じになつて、天祖様のお定めになつた、基礎はそのまゝにしておいて、肌の色その他の仕上げを、心の儘に成せとお言付けになりました。

この御神命を受けると、神様達は畏つて、自分々々の心の儘に、目鼻口耳等天祖様の骨組み遊ばされた上へ思ひ〳〵の仕上げを遊ばされました。

見ると肌の色も白あり黃あり黑あり、眼の色も靑あり茶あり黑あり、髮の色も様々に變つた人型が出來ました。

一様に並べて見ると、實に様々な、趣きの異つた人種のもとが出來ました。

この時天祖様は、神々様の仕上げをされました人の型に向つて、同じ様に呼吸をおかけになつて、天祖様の靈氣、卽ち尊い魂をお授けになりました。

天祖様の御靈を受けますと、今迄何の力もなかつた人間が、忽ち色々な表情をし、體を動かし初めました。

天祖様がお呼びになれば、はつきり

「はい。」

と答へます。他の神々様のお言葉も分れば、お互の間柄でも、樂しさうに話し初め、手を取り合つて面白さうに歌も歌ひ、舞ひも舞ひます。

それは賑かで樂しい生活を初めました。

しかし乍ら人間は、もと〳〵天上界にお留めになるために、お生みになつたのではありません。

天祖樣が人間をお生みになつた御聖旨は、地上の王者として天降らしめ、植物動物の生命を神樣に代つて懇ろに支配し、萬物と共に、尊く地上に生きて行く、萬物の靈長としての、麗はしい生命に生かす思召でお生みになりましたゝめに、天上界で人間の肉體と魂が一體となつて準備が出來ますと、こゝに初めて、神の子天降しの御業が行はれました。

天祖樣は、お生みになつた、人間に向つて仰せになりました。

「汝等は今から地界に下るのである。

地界にある總ての萬物は、一塊の土、一滴の水も、我が生み滿たして、我が力で生してゐるのであるから、この事を明らかに知つて、地界に行けば、總ての物を尊び生かし、假初の事にも、無意味に我が力を汚し、害はぬ樣に心せよ。

若し汝等が心曇りて、假初にも萬物を我が物といふ心生じ、汚す時は、我咎むるにあらねども、自然の力は忽ち變じて、汝等の心身に、不幸といふ禍を生ず。

かゝる事なき樣、よく〳〵心せよ。

人と人と地上に交り生くる時は、我が命じたるまゝに、心と身を親しみ、假初にも僞る事があつてはならぬ。

若し汝等この敎へを忘れ、假初にも僞り貪り天意を犯す時は、忽ち天を離れて、幸福を失ひ不幸な境涯に落ちて、尊き神の子としての生命を失ふ事がある。

かゝる事なき樣に、よく〳〵心せよ。」

と仰せられました。

又天祖樣は、

「汝等は神に代つて、地上に降る、萬物の靈長にして、支配者なれば、地上に於ける王者である。

ために、我うつし生かしてある植物動物の生命をも、我に代りて慈しみ育て、假初にも無益なる事に、その生命を虐げ害ふ事があつてはならぬ。

汝等よく萬物の生命を慈しみ育てる時は、萬物も亦汝等の生命を尊び祝福せん。

しかし乍ら若し汝等萬物の生命を虐げ害はゞ、その報ひ、汝等の生命に現はれて、思はざる過ち不幸を生じて、無冥界に迷ひ入るであらう。

ためによく〳〵心して、汝等地界に下らば、我より與へたる、眞澄の眞心に依りて、淨く清々しく、その身を照し、行を正して、無限な愛慈悲誠の行に生きて、その生命の力を、地上に輝かせよ。

汝等常に眞生命に輝く時、天は汝等を祝福するであらう。」

とかく御詔らせ給うて、各々仕上げされた神を守護神として、地界の各地に下し給うたのであります。

これから地上に人間が神の子としての、生活を始めました。

神の子

人は天祖様の御稜威から生れ、尊い御神勅を受け、天則を明らかに守る事の誓ひを立てゝ、地上に天降りました。

それからは天祖様の御神訓を守つて、天恩物を尊び、清き純眞な眞心を以て、人と交り、植物動物の生命を懇ろに慈しみ育てました。

ために地上は天上界と等しく、和やかに清く、御空に無數の星の輝く時、地上には、萬花咲亂れ、芳香復郁として、天祖の御稜威を讃えて歌ふ、神の子なる人の聲、動物の聲が自然に和して、誠に〳〵麗はしい有様でありました。

然るに何時の世にか、人の心魔神の邪念と妄念を受けて、魂曇り、自我の心を生じ、天祖様の御神訓に背いたゝめに、次第々々に天を離れ、遂に無冥界に迷ひ入りて、惡魔のために、その心その身を弄ばれ、天恩物を汚し害ひ、萬物の生命を虐げ、又無益に命を奪ひ、人と人との

間には、肉身の中にても、疑ひ憎み心を生ずる様になりました。

そして激しく爭ひ、その命さえ奪ふといふ様な殘虐を行ふ様になりました。

天祖様はこの有様を御覽遊ばされ、尠からず御心を惱まし給ひ、遂によき種のみ選び殘して、後の者は皆御稜威に依りて御消滅になりました。

天祖様はこの御業を御現はしの後、又再び色々な成分をお生みになつてもとの形に等しき地球をお造りになりました。

これが今の世界の初めであります。」

天つ神の御發生

「天上界では、天祖様が前の世の事につき、種々お考へ遊ばされ、再生の世は、飽迄大宇宙なる神の眞理に依りて、地球を御經營遊ばす御心に依り、畏くも伊諾那岐伊諾那美尊と稱へ奉る、男神女神の、その性相反し乍ら、平等の力の備り給ふ、尊い神様をお生になりました。

この二柱の神に天祖様は、尊き御稜威を授け給うて、海上に天降らせ給ひました。

天祖の御稜威を受けて天降らせられました、二柱の神様は、海上にお降りになつてその初めに、試みとして、海中から御鉾を以てお引上げになりました島が、この寶島でございます。

それから次々に大小の島をお生みになりました。

それが皇孫の天降り給へる、聖地日の本の國であります。

それから次第に世界の國土をお生みになつて、國生みの御業が終ると、日の本の國なる聖地に天孫降臨の宮居を定め給うて、天上界にお歸りになりましたのでございます。

天祖様は大變お喜びになつて、

「汝等よく我が意の如く、地球を造り固め來れり。

この上は先の世に殘し置きし種を、試みに下し移さん。」

と仰せになつて、植物動物人の種を各地にお下しになりました。

天祖様は又二柱の神を讃え給ひ、

「汝等は今より正しき神結びの式に依つて、我が力を受け、宇宙三千世界を輝かし掌る神を生むべし。」

と仰せになつて、天の御柱を立て給ひ、男神を右より女神を左より、三度廻らしめ給ひ、神結びの尊き御業を行はせられました。

これが今の世の男女縁結びの儀式の起りでございます。」

天照皇大神

「天祖様の御稜威に依りまして、伊諾那岐伊諾那美二柱の大神様は尊い神結びの御業に依り、正しき御結婚の式を行はれましたゝめに、畏くも

天照皇大神様が大宇宙に御出現遊ばされました。

この皇大神様は、天祖様の御稜威を、そのまゝお受けになつて、生れ給ふ日の神であらせられますために、御稜威は廣大無邊にして、御光りは三千世界に隈なく輝き、一切の生物の命を生み養ひ給ふ御力にてあらせられます。この大神様が、現はれ給うてから、三千世界は、總て萬物皆陰陽に徹底して動き働き、眞理は不變となつて、自ら天則が明らかに定つて終ひました。

この皇大神の次に月讀の尊といふ、清く尊き大神様がお生れになりましたが、この神は夜の世界をお照しになる樣に、親神様の御神命を受けて、夜の世界に入らせられました。

次に素盞嗚尊がお生れになりました。

親神様はこの神様に、天が下に生み出し給ひし地上の國土に、山、川、岡、里、野、海邊の區別を立て給へと、お命じになりました。

ために素盞嗚尊は直に天が下の世界にお下りになりまして、まだしつかりと出來上つてゐない、國土に、山、川、丘、里、野、海邊等、總てに渡つてあらゆる、尊いお力を盡されまして、完全にお作り上になりました。

この御業が終りますと、素盞嗚尊は、天上界へお歸りになりました。

天照皇大神様は、大變素盞嗚尊のお德をお讃へになりましたが、素盞嗚尊は、御自身が力

の強いあらたかな神様でありますために、御氣象も剛毅にあらせられました。

ために畏くも、天照皇大神様の御心に背き奉る行が屢々ございました。

このために大神様は、二柱の祖神様の御信任厚く、又大神に仕へ奉る、天つ神八百萬づの神様から、無限なる崇敬をお受け遊ばされるのに、素盞嗚尊が御心に背き奉るは、之卽ち德の足らざる所との、畏れ多い思召から、御自ら天岩屋へおかくれになつて、御魂淸めの御業を遊ばされました。

これがために天上界では、御光りの大神様が、岩戸の中へお隱れになりましたので、世の中は暗黑世界に變り、眞理は滅却して、惡魔は横行し、實に混沌として、暗澹たる狀態になりました。

この時に天つ神八百萬づの神様は、尠からず神慮を惱まし給ひ、大神様の御出現を願ひ奉るために、御神議をこらさせ給うたのでした。

神様方の、高天原の御神議は、誠に嚴かな大會議でございました。」

八坂瓊曲玉

その時議長になられましたのは、八百萬づの神様の中でも、最も智惠の深い神様と言はれました、思兼神でありました。

先づ最神に素盞嗚尊には、下界へ下り給ふ事をお勸め申上げる事に一決しました。次に神々は思ひ〳〵の御意見を御發表になり、その御才能に應じて、夫々仕事をお引受になりました。

天兒屋根命は太玉命と共に、天の香具山へお入りになり、榊の木を伐り出してお出でになる事になりました。

玉祖尊は、御玉をお造りになる事に決りました。石凝姥命は、御鏡をお造りになる事を、お引受けになりました。玉を造る役目をお引受になりました、玉祖命は、淸らかな山々をお探りになつて、尊い石を澤山探し出して、心をこめて曲玉をお作りになりました。

八百萬づの神々様も、お手傳ひなされまして、各々眞心こめて、天照皇大神様に仕へ奉る赤誠信念を曲玉に表徵して、夫々謹製されました。

それが丁度神様方の數だけ出來ました。

八咫御鏡

御鏡を造る事をお引受になつた、石凝姥命は、清きこと無限なる、大神様の御霊をそのまゝに、うつし奉るために、高天原で一番尊い金を探し求めて、それを一心に磨き上げて、一點の曇りもない神々しい御鏡をお造りになりました。

この御鏡と曲玉を、大きな榊の木に、青和幣、白和幣と共に、おかけになつて、天窟屋の御前にお立てになりました。

そして神々様は、御體と御心とを、清きが上にも清く淨められて、歌を唄はれ御神樂を奏でられて、非常に賑やかに奏上遊ばされました。

天照大神様は、永い間、しんと靜まり返つた、窟屋の奥で御修行になつて、外の事は少しも御分りになりませんでしたが、俄かに岩戸の前が賑やかになつて、妙な笛や太鼓の音につれて、天つ神八百萬の神様が、舞ひ歌ふ賑やかな、面白さうな聲を聞召され、何事ならんと、玉

歩を進めさせ給ひ、御扉を少しお開けになりますと、岩戸の大御前の榊にかけてありました、八咫鏡に、その御眞影がぱつと映りまして、赫々たる御光りを、反射致しました。

神様方ははつと驚いて、我にかへり、岩屋の方を拜すると、大神様の御姿が岩戸の隙間から拜されましたので、

「大神様!!」

と口々に申上げたまゝ、大地に伏して禮拜されました。

この時天手力男命と申す、天上界隨一の力持の神様がお立ちになつて、いきなり天岩戸を押開き、大神様を岩屋の外へ、お迎へ出し申しましたので、天上界は前より明るく輝かしき世界になりました。

ために惡魔は總て皆遠くへ逃げ失せて、天上界は清く正しき神様ばかりの世界になりました。

大神様は神々の至誠盡忠を嘉せられまして、神様達より捧げ奉る曲玉をお首飾りとして、お掛け遊ばされ、御鏡は

「これ我が身と同じきものにして、我が魂籠る眞澄の鏡なれば、常に我が身に帶すべし。」と仰せられ、その時から御胸に帶し給ふ事になりました。

天叢雲劍

素盞嗚尊が、天上界から地上界にお下りになつて、出雲國簸川上の畔りをお歩きになつてお出でになりますと、神代乍らにこの谷に棲息し、雲を呼ぶ大蛇があつて、人類の命を奪ふと聞き給ひ、この大蛇をお退治になりました。

尊は後世の禍を斷つために、その大蛇をずたゞにお切りになりましたが、この時胴體から一口の尊い劍が現はれました。

尊はお手に取つて御覽になると、尊き事無限で、御劍から神氣が溢れ、御光りが輝いて、尊い尊の御稜威を以てしても、御帶しになる事の出來ない寶劍でございます。

尊は

「これは二柱の親神様が、聖地をお約束遊ばされるために、鎮めおかれた寶劍である故、天の御稜威輝きて、大蛇自然に滅びて、寶劍が現はれ給うたのである。

故にこれは天上界にあらせ給ふ、天照大神に奉るべきものなり。」

と仰せになつて、直ちに高天原の天照大神様に御獻上になりました。

素盞嗚尊は、暫く出雲に、地の神としてお鎮り遊ばされ、その御子孫もあらたかな神に渡らせ給うて、尊い御稜威に依つて、國土經營の御業を遊ばされました。

今の出雲の大社は、素盞嗚尊及び、その御子孫に渡らせ給ふ、大國主尊を初め、その他のあらたかな神々をお祀りしてあります。

保食の命

天照皇大神様は、三種の御神寶がお調ひ遊ばされましたので、非常に御滿足遊ばされまし

た。

然るに地上界を御覽遊ばされますと、素盞嗚尊は、御稜威あらたかな御子孫を國土に殘し給うて、根の國底の國に御幸遊ばされました。」

「一寸お伺ひ申上ますが、根の國底の國とは、何處の國でございますか。」

「根の國と申しますのは、この地球の眞中心の事であります。

伊諾那岐伊諾那美二柱の神は、陰陽を立分け給ひ、天地不變の眞理を御顯はしになりますと、尊い天地お清めの御祓ひに依りて、伊諾那岐の大神樣は、宇宙にあらせられまして、天照大神樣の御德御稜威を助け給うて、總ての生命の種を生ませ給ふ靈氣とならせ給ひ、又伊諾那美大神樣は、一度は黃泉國の汚れをお受けになりましたが、淨め祓ひの御業に依つて、眞澄の御靈と變じ給ひ、地球の眞唯中、眞澄の世界の司とならせ給ひ、總ての生命を生み出し給ふ、母體としての御業を成就し給う事になつたのであります。

ために、素盞嗚尊は、現し世を神去りまして、眞澄の國に御幸遊ばされ、今も母神を助け給う

て、萬物の生命生み出しの御業を遊ばされて居ります。」

「有りがたうございました。

よく分りましてございます。」

「素盞嗚尊の御子孫は、今も尙國土に榮えてあらせられますが、これは日の本の國の聖地の一部分であつて、全土ではありません。」

「御伺ひ致します。

素盞嗚尊樣が、國土に山、丘、里、野、海邊等の區別をお立てになりまして、後再び地界へお下りになり、又眞澄の國に御幸遊ばします迄の間、地球の狀態は、どんな事になつて居りましたでせうか。」

「天祖樣は素盞嗚尊が國土立分けの神業を終へさせられますと、前の世の種をお殘しになりましたのを、地界へ天降されましたので、山にも野にも海にも、植物が生まれ、動物が繁殖し、軈て人も各地に降されて、各々生活を始めました。

人間の生活は、氣候風土と、天祖様がお作りになつた、その土地の物質に依つて、自ら人間の衣食住も異つてゐますが、初めの創世時代は、人間の力に依つて作られた、器具機械がありませんから、人は皆自然のまゝの生活をしましたので、住居と言つても、今の世の如く、複雜した、華やかな家屋、造作器具はなく、宛ら野獸に等しく、土の中岩の穴等に、自然の寒暑風雨を凌ぎ、横穴を穿つて住み、着物も多くは纏はず、時には木の葉木の皮を用ふる事もあり、飲物は生水を呑み、自然の野や山海にある、植物の葉實根莖等を食し、又魚類動物の肉等も食して自然の儘に生きて、主として、弱肉强食であつたのでございます。

さりとて、分度を越えて、衣食住を貪るといふ事はなく、自然に人類の發達は、お互の力に依つて進んで來たのでございます。

日の本の國土にも、先住民族が數多穴居し、自然の生活を營んでゐましたけれども、その生活は全く野獸生活と異る所はなく、人間らしき生活は、行はれてゐなかつたのであります。

この有様を御覽せられて、畏くも

天照大神様は、保食命を天降し給ひ、瑞穗の國中つ原にて、人間の生きて行くに必要な、衣食住の種つ物と、必要な器具を作る事をお命じになりました。

保食命は大神様の御神命を畏みて、直ちに瑞穗の中つ原へお下りになりまして、これから後に生れる人間の、食ひて生きるに必要な、食物の種、その他衣服住居等總ての物の種をお作りになりました。

この御業をみそなはせられまして、畏くも大神様は、天神を中つ原に遣はされて、保食命の作り給へる萬づの種つ物の種と保食尊の御靈を天上界へお迎へになりました。

そして大神様には、保食尊の廣く厚く尊き御神德を讃え給うて、御饌神として、大神様に仕へ奉れと御神命になり、又その御德に依つて出來ました諸々の種つ物は、八萬づの神様に命じになつて、御栽培になると、見事な御收穫がございました。

畏くも大神様は、この稔りをみそなはせられまして、大變お喜びになりまして、いよ〳〵天孫御降臨の御聖意を御定めになりました。

しかし乍ら地上には、素盞嗚尊の御子孫が、尊い御稜威を以て、國土を御經營になつてゐらせられますので、そのまゝ天孫御降臨になりますと、地上に二柱の主權者がお立ちになる事になります。

それでは御神意に反しますので、天つ神にお命じになつて出雲へ遣はされ、事の眞理をお聞かせになつて、

「天孫御降臨のために、國土を返上して、天孫の御稜威を翼賛し給ふ樣に。」

とお說き遊ばされました。

初めの間は、大國主命の御子武御名方神が承服されませんで、交渉が長くかゝりましたが、ついに武御名方神樣も、天神の清く强く正しい力を知つて、大神樣の御稜威に恐懼し、謹んで國土返上の御神命を受けさせられまして、御自ら信州諏訪に鎭つて、地上に於ける國土守護の武神とお成り遊ばされました。

この神樣が諏訪明神樣であらせられます。

かくして出雲の國土は、天上界へ御返上になり、大國主命は天照大神樣から、そのあらたかな御神德を嘉せられまして、天孫樣及び國土の守護神として、廣く尊き御稜威を輝かし給ふべく、御神命になりました。

ために大國主命は五社稻荷の御神德にも、大巳貴命の御名にも現はれてお出で遊ばします。

天孫降臨

「天上界におかせられましては、天孫御降臨の準備が調ひましたので、畏くも天照大神樣は天孫瓊々杵尊をお召しになりまして、三種の御神寶をお授けになりました。そして

「豐葦原瑞穗國は、我が子孫の治めるべき國である。

汝、皇孫往きて治めよ。

寶祚の彌榮は、天地と共に窮りなかるべし。」

との御神勅をお下しになりまして、曲玉のお首飾りを天孫のお首におかけ遊ばされ

「これなる曲玉は、大宇宙に滿つる、我が靈氣の表徴にして、天つ神八百萬づの神の眞心を、現はせし寶なり。

汝この玉の親の心もて、天つ神八百萬づの神、國つ神をも、清く和やかに、知ろしめせ。

皇孫は我が現し身なる、天つ日嗣の現人神にして、地上に於ける至上至大の君なり。

天つ神八百萬づの神は、この玉の如く、清く正しく麗はしき、國つ神にして、又民草なれば、地界に於ける眞理は、一君萬民の天則動かず。

されど情は親子の如くにして、一つ眞心に依りて輝く。」

と仰せになりました。

又御鏡を授け給うて、

「この鏡は我が靈體なり。

汝皇孫この鏡を見る事、我と思へ。

我、汝と共に在りて、天上無窮の御稜威を守護すべし。

一天の曇りなき、公明正大なる神鏡の光は、須く地上世界を遍照して、人類萬物の生命を祝福せん。」

と宣はせられ、御劍を授け給うて、皇孫の尊天降ります地界に、魔神はびこりて、眞理を亂し、正義人道を蹂躙して、人類萬物の幸福を害ひ又は破壞して、天意を怖れぬ傍若無人の行ある時は、神靈滿つるこの利劍を持ちて、惡魔を膺懲せよ。

忽ち魔神は自滅して、聖道は眼前に輝く。

これ宇宙の眞理である。」

と嚴かに宣はせ給ひました。

次に大神樣は、天つ神八百萬の神を、大御前にお召し遊ばされ、

「汝等今日迄天上界にありて、我に仕へ奉れしも、今より後は皇孫の尊を奉じて地界に降り、正義忠實よくその臣道を守り盡して、聖壽萬歲國威宣揚に力を盡し、聖上の御稜威を地球上な

る全世界に輝かし、天孫世界遍照の天命を翼賛せよ。
皇孫の尊に對し、忠誠を盡す事、及び皇孫尊に授けし神寶に宿る德を守り行ふは、汝等子孫卽ち天孫民族の生きる道の寶なるぞ。
天孫に授けし、五穀初め、諸々の種つ物は、汝等が地上に生きるための種なるぞ、この種に依りて、その子孫の生命を養ひ、神寶の德を以て道を行はしめよ。
我が授けたるこの二つを、子々孫々傳へて誤らずば、卽ちその魂五臟共に清淨なるべし。靈體共に清淨なれば、惱み患ふといふ事なし。
汝等の子孫人の形を受けて、地上に生まるゝも、その靈體清く淨ければ、卽ちその身は天の神と同魂同體なるが故に、如何なる業も成し遂ぐべし。
假にもこの敎へを疑ひ、又背く事なかれ。
汝等の子孫は天地無窮に輝く、天つ日嗣の帝に仕ゆる、天孫民族として未來永劫地上に輝く寶なる事を自覺せよ。」

と嚴かに宣はせられまして、天孫に天つ神、八百萬の神を從へさせ給うて、地上に天降らせ給うたのでありました。
天孫様が地上に天降らせられますと、直ちに諸神を御指揮遊ばされ、土を耕して、天から受けて下らせられました、五穀、野菜物、果物などを、懇ろにお作らせになりました。
さうして川には橋をかけさせ、次第に道を開き給ひ、人間が神の子として地上に生きる道を御開發になりました。
衣食住も天から授かつた種に依りて、生きる様になりましたので、非常に天孫民族は、莊嚴な麗はしい生活を營む事が出來ました。
天孫様は神達におはかり遊ばされ、先に住んで居りました、野獸に等しい生活をして居りました民族にも、誤りを改めさせ、野獸に等しい様な生活を開發させ、天孫民族の生活に習はしめる様に盡し給ひました。
又天孫様は、天上界からお供をして天降りさした、男女の神様方にお命じになつて、あちら

こちらへ遣はされ、地方々々の御開拓をおさせになりました。それがために、その神様達の御稜威に依つて、澤山の村や町が出來ました。

氏神様と申すのは、この神様でございます。

又我々祖先も、この神様方から生れたのでございます。

ですから私共もこの身このまゝが神の子であります。

卽ち日本の國民は、總てが魂も身も、そのまゝが神の子であり、子孫も代々神の子であります。

聖上陛下は天照大神様の御稜威をそのまゝ御繼承遊ばされる、地上唯一の至尊に渡らせられます。

ために天地を貫く天の御柱であります。

大きな枝は氏神様で、小枝に岐れたのが、御祖先様、又我が身自身でありますから、何處迄も元と先とは、一體の力でございます。

故に日の本の國は、天照大神日嗣の帝、天つ神國つ神、八百萬づの神に依つて、麗はしく輝かしい國體を作り固めて居ります。

これがために、神と君と民とは、いつも不離の力でありまして、國民の生命は、君國彌榮のために生み下され、君國と共に榮えつゝ御稜威を翼賛し奉る所に意義があるのであります。

これが誠の眞生命でありまして、如何なる國民も、君國を離れて、我一個人の生命はありません。

これがために、日の本の國は、世界無比の國體にして、大君の御稜威は、廣大無邊でございます。」

皇位燦然

「天孫神日本餘磐彥尊は、尊い御天業をお受け繼ぎ遊ばされまして、國土を御開發になりま

した。

そして先住民族等も次第に、清き聖道にお導きになりまして、概ね國土を御平定になりましたので、大和國橿原の宮で、御即位の御大禮を行はせられました。

天皇は輝かしくも尊い高御座にお上りになりまして、天位を御踐祚になりました。

この餘磐彦尊様は、畏くも神武天皇様であらせられます。

神武天皇様は、永い間天が下を御親裁遊ばされましたが、御崩御になりますと、次の天孫が三種の御神寶を御受繼ぎ遊ばしました。

かくして第百二十四代今上天皇様に到りました。

日本の國旗が日の丸であるのは、宇宙にお輝きになる、天照大神様の御光りであると共に、天皇陛下の御稜威の御象徴として、限りなく尊いのでございます。

又、聯隊、軍艦に授け給ふ御旗は八方に光が出て居ります。

これは旭日昇天の莊嚴絶比の御光りをそのまゝうつしたのでございます。

尙又皇軍が偉勳を立てた時、陛下から賜る、金鵄勳章は、神武天皇様が、國土御手定の御時天の御稜威が天降り給ひ、金の鵄の御姿となつて、天皇の御弓の弭に止つて、太陽の如く光りを放ち、絶大莊嚴無比な、天皇の御稜威を發揮しましたゝめに、賊徒は勿論、總ての動物類は草も木も、御稜威に伏し靡き奉つたゝめに、この尊い金の鵄を勳章に表はされたのでございます。

皇軍と申すのは、天祖様の御威德を受け、皇孫の尊の御稜威を輝かすための軍隊であります。

ために皇軍は、八坂瓊曲玉、八咫鏡、天叢雲劒の三つの德の力を魂として、働きますので、いざとなると、その力は無限無量となつて、正義に仇なす敵は悉く擊滅する威力があるのでございます。

今外國人は、この御稜威を知らず、日本の國に滿つる大和魂は、如何にして教養するか、又鍛練するかといふ事を、頻りに研究して居りますが、天孫民族の有する大和魂は途中から培ひ生じたものではなく、御代の初め、天孫降臨の時に、天祖より授け給ひし根本の魂であり

ますから、萬世不變の寶でございます。」

世尊と祖師

「只今迄承りました事で、誠に尊い天孫降臨の御稜威その他天つ神國つ神八百萬づの神々様は、天照大神様の御稜威に依りてお下りになり、尊い御神德を現はし給うてゐらせられて居ります事が分りまして、本當にありがたうございます。

しかし日本のお國には、佛教といふものがございます。

又キリスト教といふものもございまして、却々その教へを信ずる人も、澤山になりました。

佛教は日本に參りましてから、餘程永い年數を經て居りますので、日本民族の心によく合ふ様に説かれてゐますが、何れの宗派も、祖師は佛として崇められて居ります。

その佛教の教主である、釋迦牟尼如來は、この世の外の世界に、光明佛といふ方があつて、

その御佛がこの世をお作りになり、總ての者の命を滿してお出でになるから、この御佛のお慈悲を蒙らねば、極樂世界に浮ばれない。

又そのお救ひがなければ、生死、病氣、煩悶、苦惱の世界から解脱出來ないと教へられて居ります。

所で佛教には、光明佛の外に、何千何萬といふ御佛があると教へられてゐます。

それを伺つて見ると、神佛何れも、名こそ神と言ひ佛と分れても、同じ御力の様に思はれます。

それが何のために、印度に生れた釋迦牟尼佛の教へが遠い日本の國に渡つて來て信仰されてゐるのでせうか。

今一つの不思議は、キリスト様です。

キリスト様は、ユダヤのエルサレムといふ所で、尊い生神様になつて、結構な教へを殘されたのですが、キリスト様は、お釋迦様の教へとは違つて、神様といふのは、天の神様唯一方である。

そして自分だけ一人が、尊い神の子である。
外には天にも地にも神といふものはないから、キリストの教へを信ずる者は地上に色々な神様を拵へたり、又今迄あるものを拜むではない。
拜むとお咎めがあるぞ。
と言つて、神様でも佛様でも、偶像物だと言つて、燒捨てゝ終ふといふ事です。
私共から見ると誠に勿體ないと思はれる樣な事を、言つたりされたりします。
國が違つてゐたとて、同じ地球上であれば、何處の國は神樣が澤山ある。
又彼處の國は佛樣が澤山ある。
又こちらの國は神樣が一人しかなくて、外の者は皆罪人ばかりといふ事は頷かれません。
今のお話を承りますと、日本の國は總ての國民が、皆神樣の子で、價知れぬ寶と仰有います。
どうもそれが本當の樣に、私共には考へられます。
しかしキリスト教では、地上の人は皆、天の神樣に背いてゐる、大罪人である。

だから容易に救はれない。
よい事をしても行つても、キリストを信じて許しを乞はなければ救はれぬと申してゐます。
それを聞いて見ると、日本の教へとは大變違つてゐます。
こんな風に根本の違つてゐる教へを、日本の國民が自由に信じますと、途中から變な魂になつて純眞な日本魂が消えて終ひはせぬかと思はれますが、如何なものでございませうか。」
「誠に結構なお說を聞かせて下さいました。
成程貴方でなくとも、佛教キリスト教を信じてゐらつしやるとか、又飽迄日本の神ながらの道を御崇仰になる場合は、當然その御不思議が起る筈でございます。
同じ國に色々の異つた教へがあるために、國民の思想が分れるといふ樣な事は、由々しい問題でございますから、さういふ事がない樣に、お話申上ます。
お釋迦樣といふお方は、世界の聖者でございます。
キリスト樣も同じく世界の聖者でございます。

何故この二人の聖者が、所を變へ、一人は印度に一人はユダヤに誕生されたかと申しますと、それは天意に依る事で、人間の力ではありません。

天祖天照大神様は、皇孫の尊に、三種の御神寶と御神勅をお授けになつて、天が下の世界遍照のために、先づ聖地日の本の國へお下し遊ばされました。

ために天孫様は天意を奉じて、地上に於て御天業にいそしみ給ふ事、幾萬年の久しきに渡らせられまして、天孫降臨から、神武天皇様の御即位迄の間は、どれ程長い年月を經ましたのか人間の力では想像出來ません。

この間に天照大神様は、天孫様が軈て國土を平定して、世界遍照の天業を進めさせ給ふ時のために、天上界に於ける、最も力ある天神に、八咫鏡、八坂瓊曲玉にこめさせ給ふ御神德を授けて天降させ給ひました。

ために釋尊の魂は限りなく清く尊い慈悲心と、光明を以てゐますから、その身は地上に於ける王者の子に生れ乍ら、何者にも心迷はず奪はれず、驀らに深山に入つて、魂を清められたのでした。

そして偉大なる聖者となつて、世に現れ、名は光明佛と唱へ奉るけれども、誠の御名は天照皇大神様の御神德を尊び、この御盛德を地上に於ける人類に知らせ、自我の迷ひに依りて、無冥世界に墮ちた者を救ひ出して、一切の苦惱界を離脱させて、光明界に救ふために佛法を說かれたのであります。

しかし乍ら、釋迦牟尼如來は、大神様から皇孫の尊の、世界遍照の御稜威を翼賛し奉るための、聖者として、遣はされた神様でありますから、その教へは永く殘されましたが、その生みの子が聖者として、世に子々孫々續いて輝く事は約束されて居りません。

ために釋尊御自身の御子も、法門に入れて、天上界に御誘ひ遊ばされたのみか、お釋迦様御生前中に、御生家の王舍城は滅びて終ひました。

そしてこの世に殘つたものは、お釋迦様の御子孫でなく、說かれました尊い法の教へであります。

その說かれました教へは、總て愛、慈悲に歸着致しまして、天照大神様の御稜威である、

八坂瓊曲玉、八咫鏡の御靈氣である事を思へば、佛教を我が國體と別なるものと考へる事は出來ません。

唯土地が變つて居りますために、佛教といふ形を變へてお說きになつたに過ぎません。

だから日本へ渡つて來て、信仰される事は結構でございますけれど、若し日本の國民が、佛教を信ずる餘り、迷信に陷つて、佛教を一番尊いと思ひ、天照大神樣や、氏神樣や御祖先を崇敬せず、お釋迦樣やその宗派の祖師ばかりを有難がつて拜んでゐると、眞理といふものが滅却しますから、我が心にも身にも家にも、色々な間違が起ります。

そして煩悶、病氣、災難などを生じて、お互に苦しまなければなりません。

だからどの宗旨を信ずるとしても、先づ大神樣と天皇陛下を尊崇し、氏神樣と御祖先樣を拜んでから、尊い慈悲慈愛の道を懇ろに敎へて下さる、佛敎にせよ神敎にせよ、その信仰の目的を拜む樣にしなければなりません。

それからキリストの敎へは、神は天主一神のみである。

地上にある人は、神に背きし罪人ばかりである。と敎へて、神佛は共に地上の偶像物である。

さうした偶像物を禮拜する事はいけない。

と敎へられてゐますが、これはキリストの生れた國には、主權者がなく、人間が個人主義に生きてゐる國であつて、地上に天祖が約束された尊い君主がないのです。

だからキリストが天照大神樣を、天の神と敎へ、國民總て地上の人は、罪の子だと敎へたのは、前にお話した、人間天降しの時の御神勅を拜すれば分りませうと思ひます。

キリスト敎で敎へてゐるのも、日本の神代の御神話も同じ事でございます。

唯キリスト樣や、お釋迦樣のお敎へになつたのは、前世紀に殘されて、再世期の種とされた、先住民族の子孫であります。

日本には、先住民族も少しは殘されてゐましたけれど、大方は天孫民族でございました。

只今では先住民族は天孫民族に敎化されまして、長い間に同化して終つて居りますが、たま

〳〵野獸性にのみ伸び、純眞な信仰心なく、正義人道慈悲慈愛を好まず、强慈非道を好み、殘忍性を持つ者も現れて參りますが、これは最も劣等なる、先住民族の流れを根强く受けてゐる者、又外國より土着したる、野獸性民族であります。

キリストの敎へは、決して間違つた敎へではありません。

誠に結構な愛の敎へ正しき敎へであります。

言葉こそ變れ、釋尊の敎へと變つてゐません。

唯天の一神を說くのが、日本で八百萬づの神を讃え、佛敎で何千何萬の神を讃へると違つてゐる樣に思ひますが、それは地上に神としての權威者がないためでありますから、何の不思議もありません。

誠に正しい敎へであります。

ためにキリスト敎で、大神樣から約束された、主權者のない、他の民族に說く時は、天の一神を說くのが正しいのであります。

それが日本へ參りますと、日嗣の皇孫が皇位を御繼承になつてゐらせられ、キリストの崇めて居られる、天照大神樣の御靈の鎭つて居ります聖地でありまして、天つ神樣八百萬づの神樣の御稜威があらたかに輝いてゐる國であります。

天孫民族である人民を皆罪人と言ふのは違ひます。

飽迄天照大神樣　天皇陛下を讃え崇め奉り、あらたかな天つ神國つ神、八百萬づの神樣を讃え奉り、日本民族を神の子といふ、崇高な信念を以て說くのでなければ、決してその敎へは、一言半句も日本の民族には徹底致しません。若しこの眞理が分らないで、この禮儀を盡さず、自分勝手な敎へを致しますと、それは悉く邪敎となつて、大神樣から嚴かな御知らせを受けて、その身は必ず破滅致します。

佛敎その他の神道でもその通り、同じ事でございます。

徒らに我が身の立場、勢力を增大せんがために、小我にこだはつて、假初にも天意を冒し奉る樣な事がありますと、大小何れの宗敎でも、悉く天祖の御稜威に依りて裁かれ、必ず身も敎

も自滅して終ひます。

この事をよく〳〵心して聖道に歸依しなければなりません。」

體と食

「今からは、人の生命の、魂と體と食の事に就て、申上げませう。

天孫樣が天降り給うて後に、天祖天照皇大神樣より授け給ひし、五穀の種つ物始め、色々な種を、地に移し植ゑて、之を生かし榮えしめて、民草の食となさしめ給ひ、又その御代迄、野獸に等しき、自然生活を行つてゐた、先住民族の魂と身をも淸め給ひ、天孫の御皇威に浴せしめ、天孫民族と同じ生活を敎へ學ばしめ給うたゝめに、先住民族等も、世と共に天孫民族に同化して、地上に住家を作り、肌に衣類を纏ひ、天の定め給ひし、新鮮なる五穀野菜物果物、鮮魚を食として生き、濫りに雜草を貪らず、動物の命を奪ひ、その肉を食する事を愼しみ、誓

つて之を行はぬ事に、生活の道を改めたゝめに、次第にその生命の威力は、野獸類と離れて、自ら淸淨潔白にして、神々しき品性人格備り、いとも氣高き生命となりました。」

「お伺ひ申上ます。

天孫樣御降臨の時迄國土に住んで居ました人は、どの樣な食物を食べて居りましたでせうか。

又住家は如何樣にして住んで居りましたでございませうか。」

「天孫樣御降臨迄の地界の人は、宛ら野獸類と同じく、自然生活をして居りました。地上は雨あり、風あり、氣候に變化があるために、住みにくいので、土の中に穴を穿ち、その中に籠りこの穴を住家としてゐました。

土の中を住家とすれば、冬暖くして夏は凉しく、雨風雪雷等のために、生活を脅される事なく、その外野獸や害蟲等が、その身を害ふ事もなく、生命を保つには、誠に安泰でございました。」

「食事はどんな風にして得てゐたのでございませうか。」
「食物は地上に出て、山や野に自然に生えてゐる草の莖葉根實などを取つて食べ、又野獸の生命を奪つて、その肉を食べました。
これがために、地上では野獸が互に弱肉强食するのみでなく、人と野獸との間にも、絶えず、物凄い爭鬪が行はれてゐました。
これがために、野獸と人との生活は、大した差異はなく、人とは言へども姿も形も、野獸に等しく、行も野獸と異ならぬ有樣でありました。」

古代の衣服

「その時代の民族は、着物を着て居りませんのでございましたでせうか。」
「衣類を纏ふにも之を作る道を知りませんため、多くは男性も女性も裸體に近い姿で生きてゐました。

たま〳〵芝又は木の皮等を細い草蔓で編み又結び、之を衣として、纏ふ事もありました。
大方は裸體生活を行つてゐたゝめ、自然に肌は毛深くして、一見野猿の如き姿で、よく谷も駈け、木にも攀ぢ登り、手足共に器用に働かせて、己が生活の資料を漁り求めてゐたのであります。
之がために、今の世の學者が、人類學を學び修めて、人の祖先は猿であると推測し、之を公に發表されるのも、一應は道理の樣にも思はれるのでありますが、之は古代先住民族の正體であつて、天孫民族の由來ではありません。
かゝる野獸的生活の民族を人間生命の本體に、清め改め生かしたのは、卽ち清き天孫民族でありました。」
「有りがたうございました。
それを承りましたので、すつかり判りました。
天孫民族が天降つて、先住致しました、野獸的民族の生命を、清め改め、天地の力が合體致

しまして、今の世が始まり、人間の生命が力強く榮えて參つたと仰有るのでございますか。」

「その通りであります。

總て今日の地上に榮えてゐる人の世の力は、皆之天祖様から天孫に降し給へる御稜威の御賜物に依るのであります。」

「誠に有りがたい事でございます。

天祖様の御稜威と天孫様の御聖德に依りまして、地上の人間の總てが、今日の様に麗はしく、その生命が榮える事が出來ましたのは、尊い勿體ない事と辱く存じます。

しかし私は、たゞ一つ不思議でならない事がございます。

それは天祖様の御稜威に依つて、お授け下さいました、御寶を種として、總ての人類の清き正しき衣食住の生活が改められまして、今日に及びましたからは、地上の人間は皆神ながらの天道を歩ませて頂き、天祖様のお力に依つて、惠み生かして頂いてゐるのでございますから、常に魂も身も清くうるはしく健やかで、樂しく嬉しくあるべき筈の様に思はれますが、この

頃の世の有様を見ますと、僅かの間に驚く程、世の中が進みまして、食物も色々美しく結構にお料理して頂き、着物も春夏秋冬夫々に、時季に合せて、色も形も模様も地質も、様々に工夫して織り又染めて、贅澤なものを用ひる様になりました。

住家も昔とは變りまして、形も間取も家具類なども、上等な材料を用ひ、自由な形に作りまして、人間の生活は勿體ない程贅澤になりました。

そればかりか、生れて來る人が次第に進んだ智惠を受けて來るためか、夢にも幻にも想像しなかつた様な力を以て、素晴らしい發明を、次々となし遂げて、電信電話汽車電車自動車を始め、海の中でも空中でも、自由に渡り飛び歩く事が出來、何千里離れた所からも、手に取る様に話が出來たりする程に、世の中が進みました。

これは人間が、他の動物と違つて、生れる時に、天祖様から、優れた魂と肉體を授けて頂いた證據でございますから、不思議とは申せません。

唯有難い勿體ないとのみ思つて、感謝して居りますが、私が不思議と申しますのは、近頃

の人は、段々體格が小さくなり、弱くなるばかりか、濫りに町にも村にも病人が出來て、こゝでもかしこでも、惱まされてゐる事でございます。

そして同じ人間であり乍ら、顏の色も目の色も精氣が失せて、どんよりとしてゐる人、又目付顏付等が物凄く光つて言ひ知れない怖ろしさを感ずる人その他行ふ事が皆間違つてゐて、人を苦しめ誤らせても、少しも自分の罪とも思はず、次から次へと誤つた事ばかりして、あすこでもこゝでも、間違ひを生じ、どの方面へ行つても、朗らかな健やかなと、禮讃し度い樣な人は段々少くなつて參りました。

町でも田舍でも、電氣の光に照らされて、夜も晝も明い世界に生かして頂く、結構な世の中になりました。

しかし人間の社會だけは、何だか行詰つた樣な、遣瀨ない樣な惱ましく、暗い感じがして、始終何かに壓迫されて、自由を失ひ、本來の健全明朗さといふものは、何處にも見る事は出來ません。

それがために、社會の人總ては、活潑さうに働いてゐ乍らも、それは何かに追ひかけられ、引摺られてゐる樣な氣分が滿ちてゐて、潑溂として、樂しく愉快に、自ら先に立つて、總ての機械の力を使ひ、人を引廻して、朗らかに快活にきびきびとして働き生存して行くといふ氣力がなく、總てが疲れ倦んで、眠つてゐる樣に感じられてなりません。

これは私の見方が違つて居りませうか。」

「決して間違つては居りません。今の時世は貴方の仰有る通りです。

貴方のお嘆きは、至極御尤もです。

貴方のお言葉は、天祖樣のお言葉を、そのまゝお示しになつたのだと、私は信じます。

では今の時世が、かやうになりました次第を申上げて見ませう。」

天孫様御降臨に依つて、地上にありし先住民族總て、古來の野獸共同生活より離れ、天孫民族の導きに依つて、天祖の定め給へる、衣食住の恩惠を受けて、その生命を養はれる事になりました。

ために人類は眞に地上に於ける萬物の長として、又支配者としての威力が現はれ、神々しい品性人格が輝き、崇高な生命に改つて參りました。

然るに近代になりましてから、外國の民族の、誤れる風俗と汚れが、日の本の國へ入つて參りました。

それが忌はしきもの、汚らはしきものとして、明らかな色形に見ゆれば、日の本の民族は、斷乎として之を拒むのでありますが、外國の過ち汚れは、形美しく、目覺むる程鮮やかで、よき色と味と薫りを持つてゐました。

これがために、衣食住共に、外國の習はしを高雅なもの、麗はしきものと思ひ、心移り迷ひて、之を學び、衣食住の生活の中に用ひ、神ながらの、清き生活を離れて、不純な生活資料を

求める事になりました。

その眞實の有様を申しますと、神ながらの教へは、

「萬づの天恩物の種に依りて生かし求め天の命ぜらるゝまゝの自然眞理を尊び、行ふ。」

之が天則でありました。

例へて申しますと、米始め五穀の實は、上皮のみを剝ぎ去りて、その中の實を食する様に定められてありました。

又野菜物も、その多くは土のみ洗ひ去りて、そのまゝ食する様、尙又果物類も、特殊の物を除く外は、外皮も共に食する様に、定められてありました。

ために五穀野菜果物、皆人間の體を組織するに、最も必要な力は、多く皮と皮に近い果肉に充たされて居ります。

神代の人は、之をそのまゝ食して居りましたゝめに、その榮養價値は、そのまゝ、人の體の組織に充てられて、骨も五臟も肉も血も、健やかに、頑丈に保つ事が出來ました。

然るに世が移り變り、外國の異れる習はしが、日の本の國へ移りましてから、五穀も濫りに搗き減して、一番重要にして、人間の健全なる體質を作る、外側の榮養素を取り捨てゝ、榮養價値の僅かな中味のみを、念入りに煮炊して、尙榮養價を少くして之を食する樣になりました。

野菜類も穀物と同じ樣に、榮養價値を多く含む、重要な皮を剝ぎ捨てて、營養少き中味を茹でゝ、更に榮養價を低め、それに調味料にて、樣々の色と味とをつけ香りよく、味よく、目で見て美しく見える樣に作り、之を御馳走と思ひ、我も喜びて食し、人にも之を誇りかに侑めますが、その實如何程、價高く量多くあつても、榮養價値が少いために、人間の强き骨と、五臟と肉と血を、力强く豐かに作る力がないのみか、餘りにも不純な、食物を攝るために、却つてその肉體を弱め、害ふ事になつたのであります。

殊に最近は、世界總ての國と、交りを結びましてから、何處の國からも古來より異れる衣食住の作り方を日の本に移し、天孫民族又之を珍らしく、麗はしく、優れたるものと思ひ、濫りに之を眞似て、自己の衣食住に取入れました。

取り分け、肉食を日本民族が取入れた事は、天を離るゝ、最も大きなる禍でありました。

「日本人が肉食をするのはいけないのでございませうか。

同じ人類であり乍ら、外國人は肉食をするのに、日本民族のみ肉食がよくないと言ふのは、何故でございませうか。」

「その御不思議は、誠に御尤もでありますが、前に述べました樣に、天祖樣がこの世界をお作り遊ばされました時に、總ての國土を、同じ樣にお作りにはなりません。

天祖樣の思召に依りまして、國土の地質も植物も、野獸類も、氣候風土も變つて居ります。

ために人をお作りになつて、地界へお下しになります時、天祖樣にお仕へ申上げてゐる神々樣に、仰せつけになりまして、各々國土に適應する樣な、體質肌の色目の色髮の毛の色等をお作らせになりました。

さうしてその變つた種類の人が地界に天降つてから食べるものも、肉食又野菜食果物食といふ樣に、夫々お定めになつたのであります。

だから何れの國でも、父祖の時代から、その生活にならされてゐますから、眞隨から、その國土の民族として、骨も五體も血も肉も出來てゐますから、祖先の食べたものを食べ、着た物を着、住家もそれに習つてゐれば、身體の健康は、完全に維持されます。

白色人種は多く、肉食であります。

亞細亞民族は、穀類野菜食を多く攝つてゐます。

殊に日本は、天祖樣の御稜威に依つて、天孫樣にお授け下さつて、天降されました清く尊い五穀野菜果物の種に依つて、總ての民族の命を培ふ樣にお定め下さいました。

肉食といふ事は、天孫樣天降りの時に、先住民族にも行はせぬ樣に生活狀態を清め改められました、神聖な魂と肉體を持つ國民でございます、これがために、遠い神代から、大和民族は魂清く、肉體清淨で、神と等しき純眞な生命を持つてゐましたから、常に五臟髮膚健やかで、假初の病の外は、病をその身に生じた事はなく、皆天壽を全う致しました。

然るに近頃は、外國人を眞似て、肉食を貪り、その他衣類も日本民族の肌に害を及ぼす原料

を用ひて作られ、華美にて有害なものを着用する樣になりました。

住居も亦古代は土に親しみ、陽光全面に充たされ、新鮮なる空氣と水に親しむ、自然生活を行つて參りましたゝめに、人は自然と共に、生きてゐました。隨つてその魂も清々しく、五體も健全でありましたが、この住居も近頃では、諸國の風を學び、高價な代償を拂ひ、煉瓦、セメント、鐵等にて、頑丈な家屋を築き、その構造は、人の生命の眞力である、土に離れ、新鮮な空氣と水に離れ、大氣に遠ざかつた建物の中に籠り、不自然な生活を行ひ乍ら、自己は之を以て、優雅高尙にして、文明なる生活と思ひ誤り、その上日々、不自然なる衣食に依りて、生活するために、恐くその生命は天祖樣の御胸を離れ、魔界に迷ひ入りて、その魂と五體の本性を曇らせ汚すために、今の世は、人間の世界を乘越えて、惡魔の跳梁する魔界を出現したので、太古の先住民族時代の野獸生活に等しく見えますけれども、それ以上に魔神の鋭く惡棘なる智惠と力が人間の生命を醫弄してゐます。

故に現今は、人の智力進み、優れたる世に見えるも、多くの人の魂神性を失ひ、天恩物を

尊ぶ眞心を滅却し、强慾非道貪慾嫉妬虚榮傲慢の心を生じ、他の魂を傷け、生命を害つても、我が慾望を充たさうとする、怖ろしい心が働き、お互に己が身にも心にも、誠を行はずして、唯理法のみにこだはるといふ、才能鋭くして、惡魔の靈に支配される人が多くなりました。これ等の人は多く肉食を貪り、行が天道に離れた、人の生命に起る現象であります。

それがために、病を身に生ずる人は、概ね肉體的勤勞を行はずして、誤れる衣食住にこだはり、日々大氣に遠ざかつて、不自然な生活を行つてゐる人々で、これ等の人々は、人間の眼で見る時は、人生の幸福者として映るのでありますが、誠は天を離れてゐるために、眞の人生の幸福を、その魂と肉體に受けるといふ事はありません。却つて反對に絶えず心に迷ひ、惱みを生じ、肉體に病を生じて、呻吟苦惱するのであります。

これ自ら受ける、天の制裁でございます。

「恐れ入りました。

今日の我が日本の民族の魂が、浮華輕佻に流れ、身體が虚弱病體になりました事も、よく悟らせて頂きました。

それにつきまして伺ひますが、肉食を致します事は、日本國民としては、絶對にいけないのでございませうか。」

「事情の許す限り、肉食は攝らないのがよろしいのでございます。

肉食を致しますと、人間の體が獸の肉に依つて汚されますために、性格も態度も荒つぽくなり、野獸性が現はれるのは、當然の事でありますし、又それよりも、野獸の靈から受ける、毒素といふものが、怖ろしく人間の生命を害ひます。

若し止むを得ぬ場合、肉食を攝る時には、清き魂を以て、その動物の靈魂を慰め、毒素を祓ひ清めて、少量を攝る事にすればよいのであります。

この心持なくして、徒らに、動物の肉を多量に貪り食ふ時は、必ず禍を受け靈及び肉體を害ひ惱み、又思はざる罪禍を生ずる事があります。

これは必ず心得べき事であります。

その他衣類の事も住居の事も、濫りに新しき風習にてらはずこだはらず習はず、天祖の定め給ひし、尊き聖の道、父祖の踏み開き傳へ來れる、自然の道にかへる事を心掛けますならば、凡そ今の世に現はれた人の心の惱み、身の病氣患ひ、その他の不幸といふものは消えて、人の命は、神乍らに清く、すが〳〵しく健やかな生命にかへる事が出來るのであります。」

人と病の種

「太古の人間は、病氣といふ事がなく、誠に體が頑丈に出來てゐて、一生健かに生きて、天壽を完うされたと承りましたが、今の世の人は、數へ切れぬ程、色々な病氣を身に生じて、苦しみ、それがために色々な治療法があつて、各々專門のお醫者樣が、夫々手當を致します。それでも治らないで、若い年で病氣に負けて、涙を呑み乍ら命を終る人が澤山ございます。これは一體どうした現象でございませうか。

誠に不思議に思ひます。

どうぞ人の身に病の生じます理由をお聞かせ下さいませ。」

「凡そ世の中に生きてゐる、有りとあらゆる者の生命は、總て種があつて、初めて生れて來るのであるといふ事は、誰も皆御承知の通りでございます。

五穀も野菜物も果物も、總て蒔きつけた種の形、色、質を受けて、生れて來ます。

禽獸類、魚介類、蟲類等何れも、種に依つてその子が生れて來ます。

これは明らかな眞理であります。

それと同じ理由で、人の身に病が生じますのも、皆種があるのでございます。

その種は何處から來るかと申しますと、地上のありとあらゆる所に、充滿して居ります。

植物にも動物にも、人の體を煩はす毒素の種が無限にあります。

又人間の體にも、數へ切れぬ程の、病の種がありますから、人は何處に生きてゐても、知らず〳〵にこの種を我身に受けるのであります。

かく申しますと、世の中が非常に怖ろしいものに思はれませうが、決して左樣な事はありません。

例へて申しますと、或人が美しい花の種を持つて野に立ち、此處彼處にその種を蒔きつけました。

ふと見ると、大きな岩の上に、僅かの土がありましたので、この土の上にも、種を蒔きました。

するとその夕方から雨が降りました。

四五日して行つて見ると、土に蒔いた種は、見事に芽を伸してゐましたが、岩の上には一塊の土もなく、皆雨で流れて終つてゐました。

軈て相當の時日の經て行つて見ますと、地上に蒔いた種は、奇麗な花が咲き、實を結びましたが、岩の上には幾度土を運んで種を蒔いても、皆雨に洗はれて芽を出し花が咲き實を結ぶ事は出來ませんでした。

これと同じ事です。

人間の體は、絶えず空氣からも食物飲物からも、皮膚からも、病の種が入つて居ります。

それだから、自身の肉體が丁度軟い土の樣に、病の種を工合よく培ひ育てる樣に出來てゐると、病の種は何處にでも思ふ所に根を下して、勢よく育つから、人の命を奪ふ程の、怖ろしい働きをするのであります。

しかし若し體全體が、骨も五臟八腑總て強く、力と生氣が張り切つて、美しい血が循環して、潑溂としてゐますと、宛ら岩の上の樣なもので、何程怖ろしい病の種が、外部からその肌に附着したり、又空氣や水や食物に混つて、體内に潛入して、戰を挑みましても、生命の基礎が頑丈でありますと、何處でも力强く病氣の種を撥ねつけます。

さうして自然に受ける大氣の力で、外部から來る病氣の種も、内部に起る病氣の種も、絶えず絶滅して、少しも不純不潔な毒素や病菌を、體内に留めておきませんので、いつも健やかな生命として生きる事が出來るのでございます。

要するに、患ふ患はないといふのは、その人の體質に依る事でございますから、この事を知つて、常に強い體質を作る樣に心掛けてゐれば、決して身を患ふといふ事はありません。」

「病氣の種を生じて、患ひます樣な體質と申しますのは、日頃どういふ生活をする人に多いのでございませうか。」

「自然に逆行する人であります。

例へて申しますと、朝寢をする人、さうして規律正しい生活をせず、勞働を好まぬ人、毎日の食事を不自然に調理して、攝生を忘れてゐる人、衣類住居總て、形の華美にのみ囚はれて、自然を沒却し、心狹く自我心に囚はれ、所謂神經質にして、恐怖の念深く、又嫉妬傲慢愚痴虛僞贅澤貪慾猜疑等の心を生じ、絕えず何者かに囚はれ襲はれて、天來の眞心を閉ざされ、靈光を封じて、數多の雜心邪念が我劣じと、跳梁して、外部から樣々な毒素と病氣の種、罪禍の種を取入れ、之を眞劍で培つて、我が身に生かし、又それを外へも放射して、我が五體を通して、人の魂に傷け、人の生命をも損ひ世の中をも濁し禍する樣な働きも致します。

人一人の生命が誤つて、眞の神性を滅却した時は、自己の身に、病不幸を生じて、苦しみ惱むのみでなく、己れが怖るべき不幸の種となつて、他の人の幸福を奪ふといふ、怖ろしい働きをなすものであります。」

「よく分りました。

仰有る通り、人間と生れ乍ら、天道に背き、誤つた心を持ち不自然な行を致しました時は、心にも身にも病惱みを生じて苦しみ、それが我一人で納らず、大きな不幸の種となつて、數多の人の幸福を奪つて、惱ませるといふ事は、私共目の邊り、幾つもその實例を見て居りますので、仰せの事が肝に銘じます。」

「お分りになれば結構でございます。

心に感じた事は、魂の種でございます。

又肉體を保つ骨も五臟八腑も血液も、皆飲物食物に依つて、構成され補はれて行くのでございますから、日々の食物飲物が清淨で天與の榮養價をそのまゝ傷けない新鮮な物で、毒素を含

まないものを、日々清々しい心持で、感謝の念を以て、その眞理を、魂を以つて味ふ事を忘れなければ、飲食物の總てが、清淨潔白、剛健不屈な氣力となつて、その肉體を生かしますから、假初にも病を生じて惱むとか、又は些やかな事にも心動き、己が煩悶苦惱し、人を惱ませる樣な事は絶對にありません。

要するに、誰も世の中の人は、不幸を好まず、幸福な生命に生き度いと願はぬ人はありません。

それでゐて、望む幸福は遠ざかり、拒む不幸が身を離れないといふ事は、誠に哀れな事でございます。

さりとて徒らに焦りましても、心身の生活が、自然と逆行してゐては、眞の幸福は摑まりませんから、何は兎も角、自己の心身を眞理にかへらせて、天道に照されて、公明正大な人道を歩かなければなりません。

眞の幸福の種

眞の幸福な生命を、地上に求めやうと念願する人は、先づ幸福の種を蒔かねばなりません。

それには我が心身を健全明朗剛堅な組織にするために、自己が絶えず交つて生きる世の中に正しく清く強く明るい純眞な、豐かな眞心の種を絶えず蒔きつけ、培つて行くといふ事を心掛けなければなりません。

自分一人健康であつて、明朗に生きやうとしても、周圍に色々な不幸な事が生じたり、悲しみ嘆く人があつたり、色々な禍が生じてゐては決して本當の幸福は得られません。

我人諸共に、幸福に生きる樣に、絶えずよき行を以て人を感化し、周圍を明るくする事を忘れてはなりません。そのためには、身分の高い低い學力智能の有無、男女老幼の區別はありません。

總て人は皆平等に、天祖様の御稜威を受けて人と生れ、同じ大氣の御恩德に依つて、自己の生命を生かされて居りますから、我といふ考へは、小さな自我に囚はれた時の邪念であり、惡夢でありますから、假初にもこの心が働く時は、我も惱み、人をも惱ませます。

故になるべくこの小我の自我心が、跳梁せぬ様に用心して、常に四海同胞といふよりも、萬物一體といふ心を以て、大悲大愛の天祖様の御稜威の下に、親しみ合つて生きるといふ觀念で生活する事が大切であります。

この心が光つて居りますと、自ら天地萬物に、心から感謝するといふ、大きな眞心が滿ちて參りますから、我人の區別なく、總ての者を、心から禮讃し尊ぶ心が、自然に生じて來るのであります。

これは言ひかへて申しますと、信仰的信念の生活といふのでございます。君に忠義といふ事も、先輩者から敎へられて、漸く承知するといふのでなく、我が眞心から、聖上陛下及び皇室の、廣大無邊な御恩德を感じて、大君のため國のためには、我身を捧げて盡す事が、無上の光榮であると、眞心から感じて、それが言葉にも行にも明らかに現はれて來るのであります。

又親に孝を盡すといふ事も、親が幼い者を、深い慈悲心を以て、艱難苦勞して育てゝ呉れたから、その恩に報ゆるといふ様な、形にこだはる單純な考へではなく、三千世界あるとは言へど、我が父母として、天祖様が選び給うた親様は、天が下に外にはない。

我が父母こそ、肉體は持つて居られても、天祖様がお選び下さつた、神の使の親様である。天祖様に代る生神様と思へば、親の姿から光を見る様に感じて來ます。

ために、理由や理窟は消えて、唯有難く、勿體なく懷しく感じられて、親の心を慰さめ、孝養を盡さねばならぬといふ觀念を生じ、それが眞心と實行に現はれて來ます。

これが至孝の德でございます。

又食物を頂く時、この食物飲物は、總て我が身我が生命を養つて頂く、天祖様の御恩德と思へば、隨喜の涙が溢れて、感謝しないではゐられません。

勿體ない、有難いといふ言葉は、自然に口からも洩れ、手にも現はれて、合掌となります。

かゝる清淨な心持である時、決して不淨なものを口にする事は出來ませんから、いよ〳〵心も身も清々しく、健やかになります。

この生命に生きる時、朝は太陽と共に床を離れ、新鮮な大氣を受けて、地上に立ちます。

さうして自己の生命を禮讃します。

この生命ある所、何に限らず自己の務めに向つて、勇猛邁進する事が出來て、假初にも業に倦むといふ事はありません。

ために常に規律正しく、爽快な氣分で、生命の力に溢れ切つてゐますので、心身共清淨健全、剛健明朗でありますために假初にも我からも人からも、魂を汚され、曇らされる事なく、病氣の種を、全身何れからも、芽生えさせる樣な事は絶對にありません。

一生涯健全明朗な生命として生きられます。

これが眞生命の本體で、その身そのまゝが神性でございます。

兎に角人間は、絶對的神性を受けて、この世に生れた、尊い生命を持つて居りますから、何時如何なる時でも、自我の心に迷つて、不純な生命に汚してはなりません。

いつも清々しい氣分で、ゆつたりとして、言ふ事する事、皆公明正大で、獨りゐる時も、人と交る時も、正義と至誠の觀念と行で、貫くといふ事が大切であります。

人には正しい誠の言葉を語り乍ら、我が心と行に、不純僞りがありますと、之が一番弱身です。

人から信じられても、我自ら己れを信ずる、確固たる信念がないから、弱いのであります。

信念が弱いのは、誠心でないため、天に通じないからであります。

至誠天に通ずと申しまして、公明正大なる日々の生命の生き方ほど、強いものはありません。

天來の誠心を種として生きる、これが誠の人生の最大幸福への種でございます。」

病と醫藥

「人の幸福と眞生命の種といふ事につきましては、よく分りましたが、近頃病人が非常に多くなりました。

そして病氣になると、すぐにお醫者様に診察して頂いて、治療を受けたりお藥に賴りまして、病人と醫藥といふものは、離れる事の出來ないもの丶様になつてゐますが、人が病を生じた時には、お藥を呑み、お醫者様にお願ひして治療を受けるといふ事が、正しい事でございませうか。」

「人の生命の虛弱と健全といふ事については、既にお話を致しましたから今更申す迄もありません。

よく分つて頂いた事と思ひます。

人の體に色々な病の起る理由は、必ず體質が軟弱で、病氣の種を育てるに適應しい設備があつたからであるといふ事は御承知出來ましたでせう。

その種は色々な形に現はれて參ります。

結核菌やコレラ菌、チブス菌その他激烈な傳染性の病原菌でも、その他各種の病氣も、皆病菌といふ種があつて、それが外部からか、內部からか、兎に角その體が不自然で軟弱で、明朗鞏固な生氣を消耗してゐる時に芽生えます。

これ以外には絕對に、病原菌が體內から、患ひを生ずる事はありません。

然るに人は體の何處かに、病氣が現はれると、苦しさの餘り、すぐに醫師の診斷を受けて、治療を乞うたり、又慌てゝ藥を服んだり致します。

その時にその症狀に依つて、醫師は切開したり、藥をつけたり、又服用させたり致しますので、一時痛みを押へ除く事が出來ます。

それは太古から大氣に依りて生かされてゐる、萬物の生命の中に、天祖様が自然にお與へに

なつてゐる尊い力があります。

それを太古の祖先から、永い間かゝつて、體驗し經驗して、この毒を受けた時はこれの力で毒を消滅する、といふ樣に、醫師にその力が傳はつて居ります。

今の世の科學者が、色々の藥品を使つて、樣々な力を分析したり、現象させますのは、總て皆自然の力を、人の魂にうつして、目に見える樣に表はすのであつて、決して人間がそれを發明したものでもなく、その力を作つたものでもありません。

藥といふものは、神樣のお作りになつた、體の組織をはつきり知つて、その組織に過ちを生じた時に、又その組織の力が衰へて、そこに病氣の種が生じた時、その組織の力を助け强くして、病氣の種を消滅して終ふといふのが眞理であります。

だから藥の力が、人の病氣に効力がないとは、言はれません。

けれども若し過つて、間過つた藥を呑んだりつけたり致しますと、それが餘り毒にも藥にもならない程度の藥品なら、大した障りはありませんが、萬一効力の著しい藥品でありますと、

現れた病氣には、何の効力もないのみか、却つて健全な部分を刺戟し、禍を生じて健全な部分迄も弱めて、遂には幾つかの病氣を起させる事があります。

世の中には、初めは一つの病氣に罹つて、醫師の治療を受けてゐる中に、耳も目も腦も胃腸も惡くなつて、此處彼處に病が出て、苦しむ人があります。これはお醫者樣が、本當の人間の生命の本體を、科學ばかりにこだはつて、本當の治療法を知らないために、一つの病氣を診察すると、その病氣を治すために、他の部分を弱める樣な藥を服ませたり、注射したりします。

そのために、初めの病氣は治つた樣でも、全體から病氣が生じて、總動員して肉體を惱ませますから、どんなに金をかけて、手當をしても、効力なく、生命を奪はれる事があります。

ですから體に病氣を生じて、醫師に診察を乞ひ、藥を服む時は、經驗のない醫者を賴らず、本當に深く人間生命の本體をよく知つて、神樣と同じ樣な清い、慈悲深い魂を持つた、實力のある醫師に依らなければなりません。

誠の醫師なる人は、科學にのみこだはる、小心偏狹者であつてはなりません。

信仰的信念強く、その心清くすが〳〵しく、慈悲に充ちた魂の持主でなければなりません。

何となれば、病氣を診斷する時、唯僅かに學んだ、醫學の理法位で、單純に診斷すると、誤診して適當でない藥を調合したり、又外科の如きは、診斷を誤つて、切開手術などを致します

と、それがために命を奪はれる人が澤山あります。

又手當をして、命は取止めても、一旦大切な腹部などを切開致しますと、大切な器官を害ひますから、體質が弱くなつて、一生普通の人としての働きが出來ない樣な體になつたり、又幾度も同じ樣な現象を起して、再三切開しなければならない樣な事になります。

殊に婦人病には、時々この怖るべき誤診に依つて、命を奪はれたり、又一生役立たない體質にされて、不幸な生命に嘆く人がどれ程あるか分りません。

お醫者樣の事を非難するのではありませんが、今の御代では、醫師を保護する法律がありますから、診察を誤つて、適當でない手術が行はれたゝめに、假令患者の命が終つても、お醫者樣の罪にはなりません。その上治療代を支拂つて、悲嘆の涙に暮れて、沈默するより外に術は

ないのであります。

これ程由々しき問題はありません。

故に大手術等を行ふ場合には、如何に名高く、宏莊な建物を持ち、機械器具の調つた病院でも、研究心にのみ焦つて、人の體を切開する事に興味を持つて、研究資料のみ求めてゐる樣な、若い未熟な醫師の居る病院等へ行くのは、危險この上もありません。

何故なれば、經驗のない所へ、研究心のそゝるまゝに、輕卒な誤診が多く、醫師法の安心があるので、濫りに切開して終ひますので、取返しのつかない事になります。

誠の醫者は、靈能の力を持つ人でなければなりません。

醫師に靈感靈能力がありますと、患者の體に觸れた瞬間、忽ちどこに病氣があるか、何時病氣の種を生じたか、どうすれば治るかといふ事が頭へピンと響きます。

だからどんな大病人を診察しても、急がず騷がず、應急の處置を取り手術を要するものに對しては、完全にその手當をして、病原を取除きまして、假初にも不自然な事は致しません。

昔から醫は仁術と申しまして、神佛に代る力を以て、病者を救ふのが、醫師の眞の使命だつたのでございます。

人の病氣を治す力といふものは、藥品では、誠に僅かしかありません。それを今の世では、醫學の研究々々と言つて、幾千といふ程の病名をつけて、難しく考へ、又難しい治療法を行つてゐますが、これは間違つてゐます。

醫師は病氣や藥の名をつけたり、難しい理窟を言ふのが、使命ではありません。

人の病氣を懇ろに手當して治すのが誠の務めでありますから、醫師を生業として、生きやうと心掛けて、その道に學ぶ者は、初めから利害關係を念頭に置かず、飽迄眞正なる道念を以て、人間生命の本體を深く學び、その肉體の組織成分を明らかに知つて、靈的精神と、科學との力を一致せしめて、學びの力を進めて醫學の眞理を完全に體得した人でなければなりません。

さうして病人を手當する時は根本の體質の組織が、眞理に逆行して、軟弱に變つた事をよく敎へ諭し、自然の生活にかへつて、健全な肉體にかへらしめる樣、懇ろに敎へ諭し、今現れた

病氣の現象は、懇ろに取除いて、再び同じ現象が現はれぬ樣、又他の組織をこはさぬ樣に、愼重な態度を以て當らなければなりません。

病氣の多くは、藥品治療を幾分要する場合が多いのでありますが、全然病氣の狀態に見えて、誠の病氣でない場合もあります。

これは神經病、肺に關する病氣等の時であります。

神經病は名の如く、神經が錯覺を起してゐる現象でありますから、魂を淸く正しく丈夫に取り戻せば、自然に治つて參ります。

絕對に藥の必要はございません。

それと肺の病は、體質が不自然な生活に依つて、弱められた時、空氣の中に混つて、體內に浸入した結核菌が、時を得たりと、活動を始めるのであります。

地上に生きてゐる人間は、皆空氣を呼吸してゐます。

ために、總ての人の體內には、同じ樣に結核菌が浸入してゐますが、體の强く頑丈な人には、

この病氣は現はれず、體質の弱い人に現はれて惱ませます。

ためにこの病氣には、世界中に藥といふものはありません。

醫師に診察を受けると、非常に難しく診斷されて、絶對安靜にせよと注意され、又食物も牛乳と卵より外、食べる事を禁じたり、その他難しい手當法を敎へます。

これがために、患者は怖ろしく神經を刺戟され、不治の病と悲觀して、氣力も落ちますので、自然に體力が衰弱して參ります。

かくして熱が高いとか低いとか言つて、始終檢溫器で調べたりして、床に就かしておけば治る樣に思ひ、又これが一番懇ろな手當法と思ひ、時々注射をしたり、幾種類かの藥を服ませたりします。

その藥を分析して見ると、病原菌を絶滅するといふ樣な、威力はなく、幾分かの榮養素が含まれてゐる程度のものでございます。

これは醫師自身も承知してゐる事で、結核菌を絶滅する藥品は、今の所世界中に絶對にないのです。

それなら肺の病に冒されたら、必ず助からぬのか、屹度命を奪はれるものか、全く不治の病かといふと、決してさうではありません。

凡そ病氣の中で、肺病ほど治り易い病氣は外にないのです。

又肺病ほど費用を要しないで、完全に治る病氣はありません。

とかやうに申しますと、皆樣は吃驚なさるでせう。

そんな筈はないと、お思ひになるでせうが、これは事實でございます。

太古は人の體が清淨で、天祖樣がお與へ下さつた新鮮な五穀野菜果物鮮魚のみを食べてゐました。

そのために體質は自ら純眞で頑丈で鞏固でありましたから、他の病氣も少く、殊に肺結核といふ樣な病氣に罹るものは絶對になかつたのでありますが、人智が進むにつれ、天則を離れて、不自然不規律な生活をしたり、住家も着物も食物も、總て不純不自然になつたゝめと、心

に曇りを生じ、自我の心が強く働いて、惱み苦しむ事が多いため、この心の迷ひ曇りと、不自然な生活が一致して、全生命を薄弱にしたゝめに、病原菌の活動を生じたのでありますから、この病氣を全治するのには、唯自然大氣療法に依る外はありません。」

「自然大氣療法と申しますと？。」

「大氣療法と申しますのは、大自然にかへる事であります。

その身は土にかへり、新鮮清淨な空氣と水にかへり、浴く太陽にかへりて、その光に浴する事であります。

その方法は清淨な土にかへつて、新鮮な草木の茂る田舍又山の中等に住む事であります。

さうすれば、不潔な空氣を吸はないのみか、自己の體内から吐き出した、不潔な空氣は、皆清淨な草木が吸ひ取つて、黴菌を殺し、空氣を清めて呉れます。

水は人の生命の原素で、誠に大切な力でございます。

それ故最も新鮮清淨な水に、毎朝水量の食鹽を加へて飲むのであります。

これは絶えず體内を清め、血液の循環をよくし、便祕をしない樣に助けます。

太陽の光、これは直射を受けると、却つて餘り弱い人にはよくありませんが、木の蔭等で光りを受けますと、驚く程の力で、肉體の組織を構成し、その力を強めて參ります。

この四つの力は、人の生命の生れた元の力でありますから、この力にかへる事は、卽ち天祖樣の御胸にかへる事でありますから、必ず體の組織が更生し、健全剛堅となつて、病原菌は潰滅して、生れ變つた樣な健かな體にかへる事が出來ます。

或時有名な肺專門の病院へ、二人の患者が參りました。

一人は有名な富豪の一人息子で、今一人は世にも哀れな貧家の次男でありました。

年輩の同じ位な二人の青年が、院長の診察を受けた所、院長は何れも

「相當病勢が進んでゐるので、到底普通の手當では、全快の見込がないから、一ヶ年位入院の必要がある。

入院すれば出來るだけの手を盡す事が出來るから、全快しない事はあるまい。」

と言ひました。

富豪の家の兩親は顏見合せて、

「この子を死なせてはなりません。

この子が助かる事なら、お金は假令何千圓何萬圓かゝりましても厭ひません。是非先生のお力で助けて下さいませ。」

と言ひました。

そこで早速町の眞中に頑丈に建つてゐる、コンクリートの病院の、三階の一等室に入る事になりました。

そして看護婦も經驗のある一等看護婦を二人もつけ、ベットの上に寢ませ、濕布だ檢溫だと、細やかに手當をし、朝も晩も夜中迄手當急りなく、絕對安靜にと言つて、床の上に起上る事も禁じ、如何に求めても、一行の文字を讀む事も許されず、食事と言へば牛乳に玉子を主とし、注射と服藥にその日〳〵を送り、一日幾十圓といふ金を支拂つて手を盡しましたが、日に〳〵

體力は衰へて、半年後には、骨と皮ばかりになつて、死亡して、父母を慟哭させました。

一方同じ時に診察を受けた、貧しい青年は、この醫師の診察を受けるためにも、その診察料を得るにも、數日間苦心して、漸く都合出來た程でした。

その目的は、助からぬ病氣と解れば、なまじ生きてゐて、親兄弟やその他の人に迷惑をかけるより、潔く自決して、我身の處置をつけやうと、悲壯な覺悟で來たのでありましたので、

「先生、私の病氣はどの程度迄進んでゐますか。治りませうか、或は駄目でせうか。」

と眞劍で尋ねました。

院長は首を傾げて、

「君の病氣は餘程進んでゐる。

このまゝにしておいたら、半年もゝたないだらう。

それに君の樣な狀態で、親兄弟と一緒にゐると、非常に猛烈な病原菌を發散するので、外の

人に傳染する虞れがあるから、何とか考へなくちやいけない。
入院する事は出來ないのか。」
青年は淋しく笑つて、
「先生、私の姿を見て下さい。
入院の出來さうな人間かどうか、御想像がつきませう。」
院長は頷いて、
「全くお氣の毒だが、しかし困つたものだね。」
と言ひました。
青年は病院から歸ると、深く何事か決心して、兩親には、
「當分の間、浮世を離れた世界へ行つて、病氣と戰ひます。
若しいつまでも歸らなかつたら、これ迄の壽命しかなかつたものと諦めて先立つ親不幸をお
許し下さい。」

といふ簡單な遺書を殘して、漂然として出て行きました。
そしてこの青年は人里離れた、深い山の中へ入つて行きました。
一度死を決すると、非常に意志が强くなり、心が剛健になつて、
「死ぬ事はいつでも出來る。
何時迄生きられるか、生きて見やう。」
と考へて、空氣のよい山の中腹の岩穴に入つて、こゝを棲家とし、清らかな山水を掬つて飲み、
川魚を取つては火で炙つて食べたり、自然に野山にある草の根木の葉木の實などを食べて、布
團も被ず、自然に身を委せ、新鮮な空氣を吸ひ、輝かしい太陽の光を浴び乍ら、心に委せて、
あの山この山に遊んでゐる中に、初めは幾分疲れが出て、苦しみを感じたのが、半月一月とた
つうちに、次第に體が丈夫になり、山の生活に馴れると、膽力が出來て、一ヶ年程後には、不
思議な力が出來て、二十貫三十貫の岩でも樂々と上げる事が出來、根が相當に張つた木でも、
少し力を入れると容易に根こぎに出來る樣な力が出來て參りました。

そして自分でも驚く程頑健な、岩の様な體格になつたので、一年前に診察を受けた院長の所へ行つて、診察を受けました。

院長は餘りに頑丈な體を見て、

「君は何處が惡いのですか。」

と訊ねました。

「僕は肺が惡いのではないでせうか。」

といふので、院長は青年の體を一寸調べて見ると、肩を叩いて、

「君冗談じやないよ。

こんな素晴らしい體を見たのは僕は初めてだ。」

と言ひました。その時青年は、

「しかし僕は一年前、先生から絶對助からぬ、不治の病だと宣告された事があります。

先生はもうお忘れですか。」

と言ひました。院長は

「あゝさうだつたか。思ひ出した。

それにしても君は、どうしてこんな頑丈な體になれたのか。」

と問ひましたので、青年は今迄の捨身になつた自然生活を殘らず話しました。

それを聞くと院長は深く頷いて、目の前にあつた聽診器を捨て、檢溫器を折つて言ひました。

「僕は君に本當の醫者の道を敎へられた。

今から僕は本當の醫者になつて、人の命を助けやう。」

と言つて、今迄の病院を止めて、人里離れた、海岸の、後に美しい山を負うてゐる、南向の廣い土地を手に入れて、そこに理想的な病院を建て、不治の病と思ひ乍ら、千に一つの念願から賴つて來る患者を收容して、自然大氣療法を行つて、大概の患者を治して居られます。

これは一例に過ぎませんが、外の病氣もこれと同じ樣で、幾つかの名に分れて現れて出ても、もとは同じ種で、不自然な生活から、自然に逆行し、體質を病の根城になる樣に自ら弱くした

から、生じた事で、總ての病氣の根を取除くのには、自然眞理の生活にかへるといふ事以外には、各種病の根本治療法はないのであります。

これを世の中の人がよく悟つて、常に心掛けて、健全なる心身を保ち、誤つて病を生じた時は、忽ち反省して、自然の狀態にかへれば、解決はつくのであります。

病人と手當法

昔から病人には必ず手當といふ事が言はれてゐます。

この手當といふ事は、誠に重要な事で、病人に限らず、誰でも人はお互に、懇ろな手當が大切でありますが、今は主として、病人に對する手當といふ事に就てお話致しませう。

病氣になると、醫師に診斷を受けたり、藥を服んだり、又は色々心遣ひをして、病の癒える樣に力を盡す、この事を手當といふのであります。

又直接醫藥の手當に依る以外に、食物着物總ての事を、懇ろに世話をするのも、皆手當であります。

一に看病二に藥といふ諺があります樣に、人が病に冒された時、醫師の藥に賴る事も、時に取つては方便でありますが、それよりも看護をする者の手當法が大切であります。

どんなに權威のある醫師の診斷を受け、効果の多い藥を用ひても、一旦病を生じたからは、自然の力に依つて、その病を癒すより外に道はありません。

治療も藥も、そのために施すものであります。

だから醫師は眞心から、清い正しい明るい心を以て、間違ひのない診斷をして、治療をする時も藥を調合して與へる時も、必ず治すといふ眞心をこめて、施さなければ、効力は現はれません。

又看護に當る人も、常に朗らかな明るい純眞な眞心を以て、始終微笑み乍ら、病人の心を慰め、假初にも、病人に心を使はせたり、悲しませたりする樣な事を聞かせたりしてはなりませ

ん。

又淋しい感情を起させたり、苛立たしい心持を起させたりしてはいけません。

食事や藥を侑める時も、必ず眞心こめて、病人の氣力が強くなり、體の力が恢復する樣にと祈つて侑めなければ、効力はありません。

殊に頭を揉むとか、體を擦るとかいふ時にも、外事を考へ、心を空虛にして、唯手だけ差伸べて、形式的に動かしてゐたのみでは何の効力もないのでございます。

病人が體の何處かゞ痛いとか、疼くとか訴へた時は、心を鎮めて、親切な和やかな清淨な氣持になつて、一刻も早く、病人の苦痛を除いて上げ度いといふ事を、心に念願して手當をしてゐますと、その眞心の力の程度だけ、病人の苦痛を取除く事が出來ます。

それはどういふ譯かと申しますと、皆樣も御承知かも知れませんが、動物は體手足何れかを怪我すると、すぐに口で嘗めます。

すると何時の間にか、傷口が癒えて終ひます。

これは天祖樣が、動物のために、夫々怪我過ちのあつた時は、自分の力で治される樣に、舌に尊い能力をお與へになつてゐるからでございます。

その外動物類がお產を致しました時は、皆後始末は口で奇麗に、嘗めて取り、生みの子も我が身もすつかり不淨を舐り取つて、何の不自由もなく、すく〳〵と育てゝゐます。

之皆自然にその力を舌と唾液に備へられてゐるからでございます。

人間の舌にも、動物と同じ樣に、不思議な癒能力を與へられてゐますが、人は舌よりも、手に一層大きな癒能力を與へられてゐます。

それでありますから、手といふものは、どれ程幾つかの働きをして、その力を發揮してゐるか分りません。

何をするにも、その手で行ふ時、眞心が籠つて致しますと、必ず麗はしい結果を見る事が出來ます。

同じ手を働かせても、眞心が籠らない時は、色々な間違ひが起り、働きに威力がありません。

殊に病人の世話をする場合、總て眞心を、手に籠めて力を盡さなければなりませんけれど、患者に直接手を觸れる場合は、一層大切であります。

掌は神様から受けた、無限な靈能力の器でありますから、その器に眞心こめて、ゆつたり患部に當てた時、眞心をこめて靜かに祈つてゐると、宇宙に滿ちてゐる精氣の力が、自分の體を通して、その掌に集つて來て、病人の體に傳つて行きますから、人の肉眼では見えませんが、その力が不純な惡氣毒素を奇麗に消滅して、新しい氣力を全身に漲らせますから、次第に樂になります。

さうすると病人は、苦痛を忘れて、すや〳〵と眠る様になります。

かういふ工合に、懇ろな手當の出來る、信仰的信念の深い看護人がついてゐれば、大概の重病者も必ず治癒します。

この眞理をはつきり知らなければなりません。

かやうに申しますと、皆様方は、不思議な様に思はれる事でございませうが、これは決して、

假初の言葉ではありません。

皆様方がよくお考へ下さればはつきり分ります。

自身の頭が痛い時、お腹の痛む時、又何處かに怪我をした時、無意識のうちに右か左の手がそこへ行つて押へます。

齒の痛む様な場合も同じ事でございます。

これが誠の手當で、痛む部分をじつと押へてゐれば、自然に治りますが、手を離すと、痛みは却々止りません。

切傷などを生じた時、すぐに手で押へて二十分か三十分間、じつと手を離さないで居りますと、血も止つて、直きに傷口が癒えて、奇麗に全快して終ひますが、慌てゝ有合せの藥をつけたり、不潔な水で洗つたり、有合せの布で拭いたりしますと、却つて傷口に黴菌が入つて、患部を大きくして、長い間惱む様な事になります。

決して不自然な事をしないで、一寸した怪我をして、醫師の治療を受ける程の必要のない場

合は、直接口で傷口を清め、手を奇麗に清めて、暫く押へ、出血を止めてから繃帶をしておけば、必ず完全に治ります。

總ての病氣も怪我も懇ろな手當といふ事が大切であります。

殊に心に大きな衝動を受けるとか、惱みを生じてゐる人には、慰めと明朗親切といふ、心の手當が大切でございます。

決して理由を調べたり、難しい理窟を說いたりしては、何の効力もないばかりか、却つて氣分を昂奮させ、一層不自然な狀態に陷れて終ひます。

心の衝動に依つて興奮したりする者は、唯懇ろに慰めて、靜かに手當をして、ぐつすり眠らせる事に依つて、精神が冷靜になり、普通の常識にかへりますから、判斷力がついて參ります。

總て病氣は魂がもとになつて體に現はれ、業にも現はれますから、常に魂を精氣の力で、清く磨き鍛へて、光々と輝かせてゐなければなりません。

癒能力と生命

「人が病氣になつた時、餘程重い病人だと思つても、そのまゝ捨てゝおいたのが、何時の間にか治つて、驚く程の元氣で働く人もあるし、又一寸した輕い病氣でも、大事がつて入院して、ありとあらゆる手當をして、世話をしても、遂助からずに、命を終る人もあります。

これはどういふ理由でございませうか。」

「人の體は前にもお話申上げました樣に、人間自らの力で、自由に作る事は出來ません。

總て天祖樣が、大氣の力に依つて、お作り下され、惠み養つて下さるのでありますから、體全體五臟八腑皆、天祖樣の御靈力に依つて作られてゐますから、頭から足の先の、どんな細い部分迄誠に細密にお作り下さつてあります。

そして目耳鼻口等を始め、頭胸腹部手足等に備へて下さいました、構造には、各々尊い働き

の出來る力を與へて頂いてあります。

さうして骨組や筋肉その他、目にも見えぬ細い部分に迄、餘す事なく神氣が滿たされて居ります。

人の體はそれ程尊く作られてゐます。そして各構造、器官が、各々與へられ能力を發揮して、絶えず働いてゐるのでございますが、その全體の機能の中に、尙精氣といふ生かす力が始終働いてゐます。

丁度それは、我が日本の君國を守る、皇軍に譬へたらよいと思ひます。

一口に皇軍と申しましても、海軍陸軍空軍に分れ、それが又色々使命に依つて、兵科が分れて居りますが、外國で若し日本を侮辱したり、誤解したりして壓迫を加へる樣なものがあれば、各〳〵使命に依つて擧つて之を擊滅して終ひます。

又常に外國から侵入しない樣に、周圍を警備する者と、內部を守る者とが一致して働いてゐます。

これと人の體の組織とは、同じ事でありまして、體に異常のない時は、白血球赤血球といふ樣な精氣が、體內の何處にも充滿して、どんな病原菌でも、體內に侵入して來たら、總動員で擊滅しやうと待構へてゐます。

だから健康な人が、世の人の怖れる、コレラ、ペスト、チブスなどの非常に激烈な黴菌を澤山呑んでも、精氣の力が之を見付けると、

「强敵襲來!!全軍集合!!」

といふ指揮に依つて、全身から集結して來て、瞬く間に黴菌を消滅して終ひます。

ためにその戰の間、少し熱が出たかな?と感ずる位で、あとはけろりとして何の異狀もありません。

又外側に傷を受けた時には、

「外敵襲來!!卽時擊滅!!」

と號令をかけるので、全身から集つた白血球がこれを保護し、又樣々の榮養素を送つて、瞬く

間に補足しますので、患部は難なく治癒して終ひます。

之と反對に、常に不自然不衛生な生活をして、體が弱くなつてゐますと、自然に生氣も衰へてゐますから、ほんの僅かな何かの黴菌が入つても、之を驅逐する力がなく、病菌の方が強くて、忽ち勢力を增大して、體中の何處でも蝕み初めますので、本當の病氣になつて終ひます。

この時に唯驚いて、お醫者様よ藥よと騷いで、あれこれと幾種かの藥を服んだり、注射をしたり、濕布したり冷して見たりしても、大して効力はありません。

かういふ場合は、應急の手當は、しつかりした醫師に委せておいて、一方では精氣の充實法を計らなければなりません。

それは患者その人が、この眞理をよく心得てゐなければなりません。

尤も人間の生命に充たされてゐる、精氣力の尊とさを知つてゐる程の人なら、病氣なんかに冒される譯はないのであります。

始終身を患ふ樣な人は、心も自我で滿ち、體も不自然な生活をしてゐる人ですから、よく眞

理を說いて聞かせて、自身も大自然から精氣を受ける力を、準備させ、看護の人も眞心を充滿して、爽かな淸淨な心持で、信念を統一して、自分が器となつて、大宇宙から無限な精氣を、この病體に充滿させて、病原菌を撲滅させるといふ念願で、手當をすれば肉眼では見えませんが、宇宙に充滿してゐる精氣が、堂々と集つて來て、その人の體を通し手を通して、體內に透徹して參ります。

ために全程の病原菌も撲滅して終ふ事が出來ます。

この眞理は、誠に神祕的の威力がありますから、神の子である人は、常によく〳〵承知しておかなければなりません。

神樣は全知全能であらせられますが、お醫者樣は、僅かに醫學を學んで、神樣のお送りになつた體の組織を知つてゐるのでございますから、そのお醫者樣のみを信じて、濫りに尊い體を切つたり致しますと、天祖樣の御稜威に背く事になり、延いてはこの過ちのために、神の御器を傷け、生命を奪はれる事になりますから、その罪の深さは二重三重になりますからよく〳〵

心すべきであります。

自然と人生

これ迄お話申上げました事で、皆様が尤もだと、眞心に頷く事の出來ない様な事はありませんでしたでせうか。

よく考へて見て下さいませ。

今の世は色々複雜して、住み惡い世になつた様に思はれますが、これは人が天祖様の明らかにお定め下さいました、自然の聖道を踏外して、自分勝手な法律を作つたり、理由をつけたりして、天則に逆行したので、その力が相寄り、相集つて、色々な爭ひを生じたり、禍を來したり、惱ましたりするので共に苦んでゐるのです。言ひかへれば、自業自得といふ事になりませう。

世が進んだ、世が變つたと世の中の人がよく申しますけれど、別に變つた譯ではありません。

昔の人が早く見付けて、人の生活に應用しなかつた事を近頃の人が見付けて、之を人の生活の中に應用するといふだけであります。

衣服の流行といふ樣な事も、目先の變つた事を好む、人の心を樂しませるために、色々に工夫して變へて行くので、それが限りなく變つて行くのではなく、繰返し〳〵て行く丈で、別に珍らしい事ではないのであります。

比較的變つて行くにつれて、自然を離れるのが、食物と住居と人の作つた法の力、これが自然の法則に餘りにもかけ離れると、人間の世が住み惡くなり、お互に不幸になるのであります。

しかし太陽、土、水、空氣は、幾億萬年太古も今日も、神代ながら變りなく、古今萬世天地不變の力を以て、萬物の生命を生み養ひ育てゝゐる事を思へば、大自然の力といふ事が明らかに分ります。

ために人は大氣の力に依つて自然に生まされ、自然に育てられ養はれてゐる、自然の子でありますから、飽迄も自然に生命を生かすのが當然でありまして、若し假初にでも不自然な事を

すると、すぐに不幸を生じます。

嘘も不自然、貪りも不自然、傲慢も非道も虚榮も、贅澤も遊惰も、總て眞理ではなく、從つて正しくない、不正不自然な事でありますから、どんな地位にあるものも、之を敢て行へば、必ず健康も害ひ、品性人格も低くなり、信用も人望も地に落ちて、價値のない生命となるのであります。

これは總て自然眞理に逆行したゝめであります。

人よくこの眞理を明らかに體得して、天の命ずるがまゝに、自然眞理の生活へ道を進む時は、誠に光榮な生命に生きられます。

自然の人生といふのは、先づ第一に朝は必ず太陽と共に起きる事であります。

そして名譽地位身分の上下に拘らず、人間と生れたからは、必ず自已の使命を明らかに悟つて、いつも天地と共に樂しく正しく働くといふ事を、眞實に實行しなければなりません。

言ふ事も行ふ事も、正しく有りのまゝでなければなりません。

人にも萬物にも懇ろで親切であるといふ事は、天宛らの心ですから、之を行へば、我も眞心から樂しく清々しく、相對する總ての者の命をうるほし、喜ばせ樂しましめます。

飲み過ぎぬ樣、食べ過ぎぬ樣、無理に體や精神を働かせ過ぎぬ樣、夜更しをせぬ樣、餘り寢過ぎない樣、總ての行が、清く明るく正しく、ゆつたりと落着いて力强く生きて行くこれが自然に生きる人生の最も大切な生命です。

人が若し己れの力と天命を知らず、濫りに慾望を起したり、理想や空想を描いて、魂が我が肉體を離れて、架空な世界に遊んでゐると、眞心の添はぬ空虛な體は、支配する、確固たる指揮者がないために、方向を誤つて、する事なす事、間違ひばかりを生じます。

だから人は、身分の上下、學力、財產の有無等は、之天が定めたお約束でありますから、如何程心を焦らせても、我が思ふ樣にはなりません。

だから架空な世界に心を遊ばせないで、職業は何であつても、自己に與へられた使命に對し、眞心を集中して眞面目で眞劍で働けば、その汗の中から、力の中から、本當の人生の幸福の力

が掬み切れぬ程溢れて出るものであります。

又人が自分の身分を儚ないもの、不幸なものに思ひ、人の境遇を羨んだり嫉んだりするのは、愚かしき限りであります。

本當の人生の幸福といふものは、名譽や地位や學力や財寶の中に潛んでゐるものではありません。

絶えず大氣の中に、我身を投げ込んで、朗らかに正しく、眞心をこめて我が使命の業にいそしめば、この汗と力の中に、無限に幸福が藏せられてゐるのでございますから、皆樣、決して人生の行路に迷つてはなりません。

何時の日も、大自然の聖道をゆつたりと明らかに、悠々として、朗らかに、大地にしつかり足を踏みゞめて、生きるといふ事を心掛けて下さい。」

眞の財寶

今迄は眞生命の價値に就てお話致しましたが、今からは各般に渡つて、人間の生命の正しく生きる道を申上げて見ませう。

世の中の人は、財寶と言へば、直ちに土地田畑山林、有價證券お金などの樣に考へてゐますが、この考へ方は間違つてゐます。

それは前にもお話致しましたが、この世にありとあらゆるものは、人の力で作られたものではありません。

まして、大地といふ尊い寶である、一塊の土でも、人間の力で作られたものではありません。

總て天祖樣のお力に依つて、お生み下さつた天恩物であります。

太陽空氣水の事については、申す迄もありません。

作らない人に、眞の所有權のある道理はありません。

これはその時代に人が定めた法の力で、假初にその人に支配權を持たせてゐるのであります。

だからいつでも、その權利は他の人に移す事が出來ます。

どんなに澤山の財産を所有する富豪も、一朝にして、裸一貫になる事もあれば、又全くの無一物の我が身一つであつた人が、瞬く間に大きな財産の所有者になる事もあります。

これは昔からの浮世の習はしでございます。

だから財産があるから尊い、ないから賤しいといふ事は、全然當つてゐません。

唯財産を持つ人が、天祖様の御恩德を明らかに悟り、總て地上の力は、天恩物である事を知つて、之を尊び、世の爲人の爲に尊く生かすならば、限りなくその人は尊ばれるのであります。それと反對に所有するに委せて傲慢贅澤な心を起して、天恩物を粗末にしたり自己のためにのみ濫費して、世のため人の命を幸福に生かすため必要な事にも、自我の慾心から、我が財寶を惜しみ、之を生かして働かせる力のないものは、天祖様から御覽になれば、憎むべき惡魔でございます。

ですから持つてゐる財産のために、自ら絶えず苦しめられ人からは分限者と羨まれ乍ら、我が身にも心にも苦惱絶えず、物を所有するがために、苦しみ續けて、一生を終るのであります。

だから財寶を持つ人も、之を天恩物と悟つて、明らかに生かす人は、無上の幸ひを心身に受

け、自我の心に依りて汚す人は、無限の惱みを受けるのであります。

又身は一日の衣食住に事缺く程、貧しき生活をして居り乍らも、天の心を我が心として、日〳〵大地の中に悠々として、力强く正しく明るく、生きる人の生命は、天祖様から御覽になると、誠に結構な地上の寶でございます。

又その人が持つ、僅かの物質でも、正しき生命に附隨する時は、眞に尊き財寶としての威力を發揮します。

ために人は形のみ大きく、高きものを望むより、我身に持てる力を無限な寶として尊び生かすといふ事が最も大切であります。」

全人類の幸福

「この世の中に生れたものは、何れの世界に生きてゐても、皆我が身が樂しく、仕合せに生き度いと念願しない者はなからうと存じます。

それでございますのに、今の世の中を眺めますと、東洋も西洋も共に、民心が荒んで、色々な事から、絶間なく爭ひを生じ、お互の生命を禍して、苦しみ合ひ、身にも數々の病を生じて惱む人も多くなりまして、天命を最後迄完うする人は少くなりました。

それに近頃は、急に科學の力が發達致しまして、色々な武器や彈藥などが作られ、世界各國では毒瓦斯や黴菌迄作られて、お互に各國が他の國を侵略しやうと、焦つてゐますから、何時戰爭が始つて、自分達の家も屋敷も家族も、木葉微塵に粉碎されて終ふか分らない事を思ひますと、靜かに落着いて考へる程、生きてゐる生命が不安で堪らなくなつて參ります。

どうして世の中は、こんなに物騷な事になつて、人間が落着いて樂しく、朗らかな氣持で、平和に生きて行く事が出來ないのでございませうか。

今の地球上の有樣は、天祖樣の思召とは、まるで正反對に現はれて、御神意を冒し奉つてゐる樣に思ひますが、如何なものでございませうか。」

「世界人類の生命の大問題について、眞劍なお言葉を聞かせて頂きました事を嬉しく存じます。

今貴方の仰せられました通り、只今の世は昔と全く變りまして、人智が進み、文明の世になつたと考へて居る人々が多いのでございますが、誠はそれに反し、世界を擧げて、人類の世は、惡魔に襲はれ、眞の幸福は悉く奪はれて終ひました。

ために物の形は總て皆、華やかに麗しく見えましても、悉く空虛な形のみで、眞の幸福は滿たされて居りません。

ために、人は物質萬能に心を囚はれ、相競うて我も〳〵と、物質をより多く求めて、扨その中に身を浸して見ても、心はいよ〳〵空虛になつて、眞の人生の幸福をその身に深く味ふ事が出來ません。

その上樣々な過ち惱みを生じ、絶えず心と身を惱み苦しみ、不幸をかこつ人が多くなりました。又科學の力に依つて、人の命を奪ふ力を競ひ造つて、各國相互に國民が爭ふ事は、これ誠に天祖に對し、反逆の極致であります。

しかし人はかく怖るべき大反逆を繰返しながら、自己を反省するといふ事なく、他をのみ責めやうとしてゐます。

その觀念が一層大きな罪を犯す原動力となるのでありますが、總てこれは人の罪ではなく、皆惡魔の爲せる業であります。

故に地上から惡魔を消滅せずしては、人類萬物の、眞の幸福と平和を望む事は出來ません。」

「地上の惡魔とは、如何樣なものでございませうか。」

「惡魔とは、形なくして、地上の人類萬物の生命を禍する事もありますが、多くの場合は、人の體内に潜入して、眞心を蔽ひ、その身を奪つて、我が器として、强慾非道、虛榮贅澤、忘恩虛僞嫉妬貪り冷酷といふ樣な、不自然な行を人の體に働かせます。

さうして爭はせ嘆かせ、悲しませ苦しませ、怪我過ちを起させ、樣々の病氣を患はせて、人の呻吟苦惱するのを見て喜ぶのが、惡魔の魂であり、仕業であるのでございます。

科學の力が惡魔に奪はれ利用されると、濫りに人類萬物を苦しめ、その生命を害ひ、呻吟惱亂させる、戰爭を起させるのでございます。

今惡魔は世界の地上に滿ち溢れて、跳梁し續けてゐるので、世界の何れの國にも眞の平和と

いふものが、惠れてゐないのです。」

「それでございましたら、このまゝで進みますと、世の中はいゝえ世界は、どういふ事になるのでございませう。」

「仰有る通り、世の中が又世界の狀態が、今のまゝで進んで行けば、當然人類も萬物も、惡魔のために滅亡されて終ひます。」

「世の中がその樣な事になるのでございませうか。」

「しかし、その虞れはないのでございます。

惡魔は邪念の强い、魔性であるために、一時は天祖樣を冒瀆して、大地に跳梁致しますが、天祖樣の御稜威は、廣大無邊であらせられますから、目に餘る惡魔の禍も、惡魔が自ら反省して、誠の神性にかへる時を待ち給ふのでありますが、最後迄惡魔が魔性を反省せず、人類萬物を禍する事を止めない時は、必ず御聖戰の御稜威が大地に下ります。

これは過去の世に、幾度か現はれた、御神祕が、明らかに物語り教示して居ります。」

「左様に仰せられますと、天祖様の御稜威が下つて、惡魔を御消滅遊ばされ地上人類萬物の生命をお救ひ下さる時が參るのでございますか。」

「左様でございます。しかもそれは遠い未來ではなく、御稜威の顯現は近き日にあるのです。」

「恐れ入りますが、天祖様の御稜威は世界の何れの國から、如何なる形に依つて現はれませうかお敎へ下さいませ。」

「天祖様の御稜威は、神の定め給ひし聖地、日の本の國なる神ながらの神性を受けた、皇軍の生命に現はれて、東洋西洋に跳梁跋扈してゐる惡魔を撃滅して、全世界の國土を清め、人類總てを眞生命に生還せしめて、眞の福祉と、萬物の幸福を計らせ給ふ事になります。」

「それは事實でございませうか。

若しその神秘が現はれると致しましたら、概ね何時の頃から始まるのでございませうか。」

「神秘は極めて近き日に顯現します。

これは明らかな事實であります。」

旭の御旗

「降魔の神秘が、顯現する事になりますと、そのために皇軍が聖戦に進められる事になると思ひますが、旭の御旗は、東亞の何處の國に輝き初めるのでございますか。」

「皇軍の御旗の一番初めに進むのは、支那の國であります。

これは創世の時からのお約束でありますから、誰人が避けやうとしても、避ける事の出來ない因縁に依りて生ずる、一時的の聖戦でありますが、これに依つて、支那の國の五億の民族は初めて眞の幸福な生命に救はれるのでございます。」

「左様に仰せられますと、日本と支那とは、戦爭をしなければならない運命におかれてあると思ひます。

さうして支那は必ず日本に敗けると思ひますが、昔から戦爭に負けた國の民族ほど、哀れなものはございません。

だから支那も、日本に慘めに敗れましたら、國民は總て、可哀さうな境涯になるのは當然だと思ひますが、如何でございませうか。」

「戰に敗れて、國民が不幸になるのは、惡魔と惡魔の互格の戰の時にこそ國民に不幸を見せるのでありまして、皇軍は天祖の御稜威に依る聖戰を以て、惡魔を膺懲し、又全滅するのであります。

ですから聖戰恐く終つた後の日には、國土は淨らかに改り、人心爽快明朗清淨となつて邪念亡び、迷朦より醒めて、眞生命を得るがために、その心正しく清くなり、誠の人道を踏みますために、天道は明らかに赫々と前途を照し、生れながら神性なる大和民族と相和して、共存共榮の生業を營むがために必ずその生命に眞の幸福が齎されるのでございます。

今は人類の生活の總てを、清め改めの時代に入つたのでありますから、人間のみならず地上を禍する、不正不純は皆滅びる時機が到達したのであります。」

痛ましき民族

「支那の國は世界でも一番國土が廣く、人口も非常に多く、その上昔から偉大な聖者、聖賢、君子が生れて、聖道を敎へたのに何故今の樣に國民の心が、陰險で、僞り多く强慾非道の心が勝ち、總ての事に、公明正大な判斷力を失ひ、因循姑息になつたのでございませうか。

何事をするにも、全く盲目的で、自我心强きために、我と自ら國を禍し、我が幸福を害ふ樣な事のみ致しますが、どうしたわけでございませうか。

支那といふ國には、遠い過去にも、近き歷史にも、眞に國內が平和に治つたといふ事を見た事がございません。

この點餘程外國とは異つた國體の樣に存じますが……。」

「支那の國體と國民の思想感情等について、不思議に思はれると、仰有いますのは、誠に御尤もでございます。

凡そ支那民族ほど解し難い得體の知れない思想を持つ國民は外にないのでございます。

地位の上下を通じて、國民の誰にも、各自の眞心を集注して盡すといふ、信念の中心が、國

の始つた時からないために、國民はどれだけ數が殖えても、皆お互に自分々々の身の爲、仕合せのためのみを考へて生きるので、眞心を統一して、團結して共に幸福に生きるといふ素質がないのです。

たま〳〵時代々々に偉人が現れて、民心を統一しても、結局はそれは天來の眞心を種とした大悲大愛の抱擁力でなく、强く大きな自我心による邪念の力を用ふるがために、結局は我が身を禍して、無殘な終結を告げ、國内統一の大理想を成し遂げた者は、支那の國には一人もないのであります。」

「仰有る通り、全く支那の國民は昔から、不幸といふ運命に因緣づけられてゐるのでございませうか。」

「過去は全く不幸でした。

しかしこれからは、民族皆仕合せになるのです。

その理由を少し述べて見ませう。

支那の國は、人間が知つてゐる歷史に依つても、五千年もの古い昔に、既に國が始り國土に人類が住んでゐたのでございます。

創世の頃は、何處の世界も同じこと、現今の樣に人智進まず、科學の力は皆無でありましたゝめ、人類の生活は、自然のまゝで、野獸類と何等異る點はありません。

しかし乍ら人間本來は、天なる祖神が、地上に於ける植物動物の支配者として、萬物の長として、生み下された神の子であります。

ために等しく神の力をその魂に持つてゐます。

故に人間は他の動物と異り、誠に不思議な知能力を發揮する事が出來るのであります。

ために人類は、野獸と共に、地上に生活しても、自ら人間としての本性を發揮して常に動物を支配して、偉大な威力を揮つてゐたのでございます。

これは何れの民族も、同じ事でございます。

しかし他の各國の事は先づおいて、今は支那の國の事について、お話申上げて見ませう。」

支那民族の發達

「支那の民族が、次第々々に發達すると、その中から特に進んだ人間が現はれて、自分が首領となつて、他の者を命令一下支配して、自己の權力を揮ひました。

所が他に又力强く、智惠優れた人物が生れると、先の主權者を滅して、自分がその位置に代つて、恣に權力を揮ひます。

これが何時の時代も、同じ樣に繰返されて、或時は絶大なる權力者自らが、國王として君臨し、天下に號令した事も、幾度かございました。

しかしこれも、何れも餘り長くは續かず、次々と崩壞して參りました。」

「支那は歴史で見ますと、或時代には、驚くべき偉大な國王が現はれ、四百餘州を統一した事もあつた樣ですが、どうしてその力が、又地位が今日迄、續がなかつたのでございませうか。」

「それは何時の時代の國王も、皆惡魔に心身を奪はれ、自我心に依りて、假初に國を治め、人心を統一したのでございまして、天の力なる眞心を種とせぬために、眞の國内の統一を計り、國民を幸福にする事が出來ないのみか、却つて暴政惡政を行ふために、國民が悉く苦しめられ、怨嗟の的となるために、知らず〳〵の間に力がなくなり、崩壞したのであります。」

「支那の國土は非常に廣いと申しますが、何處迄が支那の國土でございませうか。」

「支那の國民は、今こそ世界の廣い事を知る樣になつたから、自分の考へが誤つてゐた事に氣がついたのでありますが、最近迄は餘り國土が廣いので、他の國のある事を知らず、自分の國内を全世界と思ひ、自分達の民族以外に外の人種はない樣にさえ思つてゐた程でございました。

しかし今は交通の便開け、忽ちにして世界の何れの國にも通じ、空は飛行機が急速度で飛ぶ樣になつたから、支那の國土も、數時間のうちに飛び越える事の出來る樣な時代になりました。

ですから、世界に對する觀念も我が住む國土を見る眼も、昔とは全く異つて來たのであります。

しかし古代からの因習があるために、國民は容易に眞理に目覺めて、自己の生命を明らかに

生かすといふ力を發揮する事が出來ないのです。
故に天が神秘を下して、支那民族の生命を、明らかに正しく、生還せしめられるのであります。
「近頃よく聞きます萬里の長城は、何時頃出來たものでございませうか。
又何のためにあゝしたものを莫大な費用をかけて、作らねばならなかつたのでございませうか。」
「萬里の長城は、今から千百數十年前、支那に秦の始皇帝といふ皇帝が出ました。
その人の力は非常に偉大であつたゝめ、一時は廣大な支那全土を掌握したのでありました。
しかし國土が廣過ぎて、隅々迄手が屆かず、ために國民の思想生活を統一するといふ事が、却々容易でないために、始皇帝もこれには甚だ心を惱ませたのでありました。
その上今の滿洲國內蒙古外蒙古、遠くは露領シベリヤの方から、異つた人種の民族が、陸續きであるのを利用して、始終入り込んで來ては土地を荒し、始終戰ひが絕えぬので、始皇帝は

思案した揚句、外國からの侵略を防ぐのには、頑丈な城壁を作るといふ事が、一番名案である。
如何なる力を以てしても、越す事の出來ない城壁を築いておけば、我が子々孫々萬代の後迄も、他國の民族に侵入されて、國を荒され奪はれる事は絕對にないだらう。
と考へて、巨大な經費と、數十年の年月を費して、あの驚くべき頑丈な長城を築きました。
あの長城は、今滿洲國との境の山海關から始つて、廣漠たる野を越え嶮岨な山を越えて、日本の里數に致しまして、凡そ八百里近い城廓を、外蒙古の方に渡つて築いて終ひました。
昔から滿洲と蒙古は、支那の領土ではなかつた事は、秦の始皇帝程の英雄さえ、萬里の長城を築いて、その侵略を防いだといふ一事を見ても、明らかに分ります。
秦の始皇帝は在世中、ありとあらゆる權力を以て、四百餘州を風靡してゐましたが、その沒後は幾代も續かず、間もなくその一族は滅ぼされて終ひました。
この外支那には、色々な權力が現はれては亡び、又立つては崩壞しましたが、この間孔子孟子などといふ、聖者も澤山現はれて、この民族に懇ろに聖の道を敎へたのであります。

しかし不思議な事には、その正しき教へは、支那民族には芽生えず、却つて海を越えて、遙か東にある、日本の國に渡つて、儼然たる大和民族の魂の肥料となつて誠なる魂は彌が上にも力強く培はれ、在來の忠孝の信念が、益々麗はしき花を開き、實を結ぶための添へ力となつたのであります。」

聖者の教日の本に薫る

「支那に生れた、世界的偉人、聖賢と謳はれる、孔子と孟子の教へが、支那に誠の根を下さず、日本に渡つて、大和民族の魂に、麗はしい花と咲き實を結んで、神ながらの日本精神を助け、忠孝一本の力に築き上げるといふのは、どうした因緣からでございませうか。」

「孔子孟子の尊い教へが、日の本の國に渡來して、國民の魂に根を下し、忠孝といふ麗はしい花の色を添へたのは、丁度遠い印度に生誕された、釋尊の教へが、印度の民族に根を下さず、

遠い日本に渡來して、日本國民の眞心に眞の根を下し、信仰の的となつて、都會にも田舍にもその教へを信じられ尊ばれるのと同じでございます。

又遠きユダヤに生れたキリストも、一生最期迄正しき愛の道を說き教へ乍ら、その身を生みし國なる、ユダヤ民族の魂には根を下さず、却つてその民族に迫害され、十字架にかけられその身を犧牲として、昇天されました。

しかもその樣な迫害を受け乍らも、尙も天に祈り、罪過ちを犯して、天を追はれたる人類の救ひを祈りつゝ、昇天した、その宏大無邊なる愛の教へは、又魂信念は、軈て世界人類の魂に、正しく芽生えず、實を結ばずして、遠き日本に來り、神性なる大和民族に深く芽生えて、正義人道の華と咲き實と結んで、大和魂を助ける威力を發揮してゐるのと、同じ事であるのでございます。

卽ち正しき聖者の靈的生命は、天祖の御稜威輝く、日の本の國より發して、世界を風靡し、使命終れば、靈の故鄕なる天祖の御稜威輝き給ふ、日の本の國に還り、初めて眞の教へとなつ